

市民科学通信

2024 年 10 月号

(通算 53 号)

2024 年 10 月 28 日 発行

発行: *NGO* 市民
科学京都研究所

事務局 E-mail :
sigemo.nao@gmail.com

目次

「市民科学通信」サロン (第 1 回)	事務局	02
NGO 市民科学京都研究所 第 25 回市民科学研究会のご案内	事務局	03
新入所員の自己紹介	青野豊一	04
【備忘録】「コミュニケーション資本主義」、そして「文化社会」 への変容、その 1—中西大輔「コミュニケーション資本主義と マクロマーケティングの意義」に学ぶ—	重本冬水	06
【翻訳】BSW ザーラ・ヴァーゲンクネヒト ・インタビュー (下)	(訳) 照井日出喜	09
【翻訳】左翼党 グレゴール・ギジ・インタビュー	(訳) 照井日出喜	15
新書散策の旅 (シリーズ第 17 回) …「おしゃべりはもうたくさんだ」 『無支配の哲学』から学ぶ…	宮崎 昭	27
反面教師	塩小路橋宅三	31
【随想 1】ネットワークとフェイク	青水 司	33
国連と U.S.A.	竹内真澄	35
漱石と大逆事件	竹内真澄	36
バイタリティ競う二人の現代建築家 —安藤忠雄と隈研吾を考える— 序論	真島正臣	39
【資料】「芸術と文化を守ることは、われわれの民主主義を守ること」 —ベルリン市州政府の文化予算削減計画への抗議行動—	(訳) 照井日出喜	47
近況短信: ファンタジーにある「老い」 —団地タクシー奮闘記「運搬ロボットはいかに」の巻— (23)	宮崎 昭	51
【研究ノート】市民の平和力とは何か	中村共一	53

「市民科学通信」サロン（第1回）

日時：2024年11月3日（日）15:00～17:00

場所：冬水文庫（京都市上京区講堂町231、樺木町通り猪熊東入ル）

参加費：無料

主催：NGO 市民科学京都研究所

協力：京都自由大学、NGO 京都社会文化センター出版会

《テーマ》

ドイツの政治状況

—極右(AfD)の台頭、社会民主党(SPD)と緑の党の後退—

概要；信号機連立政権（SPD＜社会民主党＞の赤、緑の党、自由民主党の黄）の後退、極右AfD（ドイツのためのオルターナティヴ）の台頭の中、BSW（ザーラ・ヴァーゲンクネヒト同盟）の登場・躍進、党首で元左翼党の中心人物であったザーラ・ヴァーゲンクネヒトへのインタビュー（ベルリン新聞、2024年8月24/25日）の内容から、現在のドイツの政治状況を話し合う場をもちます。なお、BSWの名と彼女の名は同一です。

講師；照井日出喜さん

プロフィール；専門は芸術社会学、ベルリン・フンボルト大学哲学部卒業、一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程単位取得、北見工業大学教授を経て、現在、月刊「市民科学通信」編集長。著書等は、『世界ガラス美術全集：現代 第6巻』（共編）求竜堂1992年、『フランクフルト学派の批判理論に関する研究』北見工業大学1999年、『現代ドイツの演劇状況に関する芸術社会学的研究』北見工業大学2003年。翻訳書は、ハイナー・ミュラー『人類の孤独—ドイツについて—』窓社、1992年、ハイナー・ミュラー『悪こそは未来』こうち書房、1994年、ユルゲン・クチンスキー『クチンスキー回想録』大月書店、1998年。

※照井さんの関連稿（2024年の欧州議会選挙、ドイツの州議会選挙等）は、月刊「市民科学通信」（2024年）の49号（6月号）2～11ページ、51号（8月号）27～37ページ、52号（9月号）37～43ページに掲載されています。また、「インタビュー：ザーラ・ヴァーゲンクネヒト」は52号（9月号）と53号（今月号）に掲載されています。インターネット検索（市民科学京都研究所でアクセス）で閲覧できます。

事務連絡先；sigemo.nao@gmail.com（重本）

NGO 市民科学京都研究所 第 25 回市民科学研究会のご案内

日時 ; 2024 年 12 月 8 日 (日) 13:30~17:30

場所 ; キャンパスプラザ京都 (6 階、龍谷大学サテライト教室)

＜京都駅前、京都中央郵便局の西側＞

主催 ; NGO 市民科学京都研究所 (主担当 ; 原発問題共同研究プロジェクト)

協力 ; 京都自由大学、NGO 京都社会文化センター出版会

《テーマ》

原発問題と「市民の科学」

— 科学技術の「転倒性」・「中立性」を超えて —

《開催趣旨》

NGO 市民科学京都研究所では「原発問題共同研究プロジェクト」(担当: 青水司・重本直利)として長年取り組んできました。年報『市民の科学』誌第4号(2012年)で「原発はいらない—共生社会の市民科学—」の特集を組み、その後、同誌で「原発ノー!論」にも取り組んできました。また、原発批判のブックレット版として青水司『原発と倫理問題—反原発運動前進のために—』(2014年)、竹内貞雄『技術における倫理—原発技術の不可能性と共生のマネジメント—』(2015年)、中村共一『なぜ、共生倫理なのか?—社会と市場経済—』(2016年)を発行してきました。原発問題は「国家の科学」・「資本の科学」の特徴を浮き彫りにしています。私たちはこれに抗して2009年1月の研究所設立趣意書にあります「市民の科学」の確立を目指しています。研究所はInstituteであると共にAssociation(共同体)でもあり、また共同研究プロジェクトを中心とした市民科学運動体です。原発問題をとおして、科学技術の「転倒性」と「中立性」および科学運動のあり方を根本的に問い直し、「転倒性」の再転倒と歴史性・社会性を包摂した科学技術の新たな思想と方法、そして科学運動に資することを本研究会の開催趣旨とします。

《報告タイトルおよび報告者》

- 1) 「福島第一原発事故後の小児甲状腺がん被ばく発症」
宗川吉汪 (京都工芸繊維大学名誉教授)
- 2) 「核科学技術と自然・人間の転倒性—原発は原子力の平和利用か—」
青水 司 (NGO 市民科学京都研究所専任研究員)
- 3) 「社会に対する科学者の科学的責任—『科学の価値中立性』を超えて—」
重本直利 (NGO 市民科学京都研究所専任研究員)

自己紹介

青野豊一

青野と言います。香川県に住んでいます。仕事は、農業です。退職後の第二の人生として、日々農作業をしています。

さて、この労働をしながら、いろいろと思っていることを文章化しています。そして、皆様の文章も、読んでいます。今回は、このような日々の中で思っていることの一部を書きたいと思います。

互酬的贈与効果関係について・・・管理社会を望んでいる人たち

互酬的贈与効果関係のことが理解できない方たちがいる。都市生活の中で金銭がすべてのごとき生活を幼年期からしていると、このような関係性は疎ましく思えるようだ。そもそも、この互酬的贈与交換関係をイメージすることが難しいようだ。このような生活スタイルでは、この交換関係を理解できない。

これは、このような人たちが商品経済にどっぷりと首まで浸かっていて、互酬的贈与交換関係を体感した経験が極めて薄いためである。特に、都会の新興住宅地に住んでいる核家族家庭では、この関係性を理解することは難しいようだ。家族としての世代関係を実感していない。そのために、過去との関係性は薄い。そして未来への視線も薄い。現在住んでいる家も、自分たちの世代で終わってしまう。子供たちへと、引き継ぐものがない。そして、彼らは、周囲の他の人たちともつながらない。これでは、「共助」なんていうものは、とても考えられないことになる。

*この互酬的贈与効果関係について、モース『贈与論』（森山工訳）から引用したい。

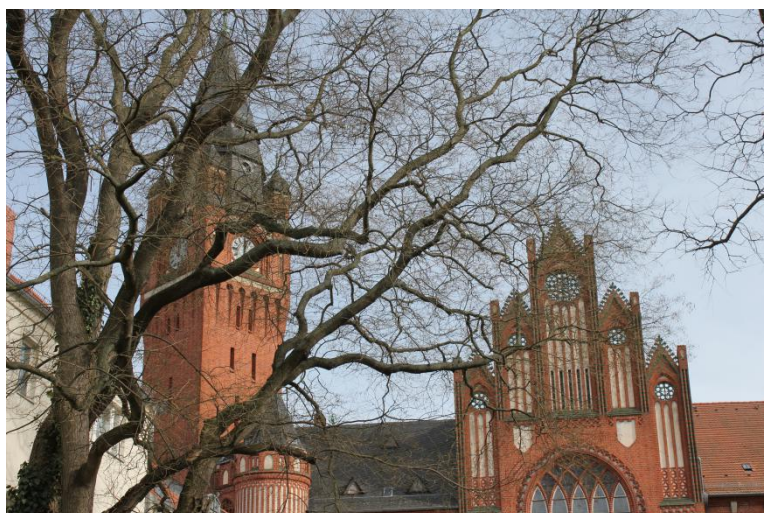
「私たちの生活そのものにしてからが、・・・、贈与と義務と自由とが混ざり合った雰囲気の中に、相変わらずとどまっている。何もかもが売り買いという観点だけでは分類されまでにはまだなっていないわけで、これは幸いである。物には依然として情緒的な価値が備わっているのであって、貨幣価値に換算される価値だけが備わっているわけではないのだ。」

つまり、近代社会の生活とそれを規定している倫理は、「贈与と義務と自由とが混ざり合った雰囲気の中」にまだあると述べている。これは、その通りであろう。生活のすべてが貨幣価

値で測られているわけではない。さて、「情緒的な価値」とは、交換に伴って発生する「神でもない、人間によるものでもない何者かの働き」が、何者かがへばりついているとしか言いようのないものの働き(観念的な)があるという意味である。例えると、モース的に述べれば、物に備わる霊性、人格性、そして力能等となるが、……。モースの言う物に宿っているとされている霊や人格とは、現実の他の人たちとは区別して独立自存しているとされている個人や集団の事ではない。贈与という交換関係を通して構成されている「間主観的」ものである。霊や人格は、このような関係性の現れ出たものである。贈与とは、人とモノの交わりであり、モノの交換を通した人と人の関係性なのだ。こうして、物は単なる「商品」以上のナニモノカとなる。マルセル・モース(1872—1950年)

*このような事は、私たちの日々の生活にもある。例えば、米不足が報道されると、店頭で販売される米の値段が高くなれば、米を作っている農家を再発見する。それまでは特には見向きもしなかったのに、……。仲買業者や小売店を経ずに、米を農家から直接購入しようとする。こうすると、小売価格より、大変安くなる。そうすると、申し込まれた農家は仲買業者に販売する価格よりも安い値で売ることになる。そんなに高価では、販売できないのだ。どうしても、配慮してしまうのだ。そしてさらに「おまけ」として他の野菜等を無料で手渡すこととなる。そして、それを機会として、時期を置いて親類・知人・友人からは何物かがお礼として送られて来る。しかし、この返礼のことなどを、まったく関知しない都市生活者たちもいる。金銭を支払えば、それで当然のような振る舞いをする人たちもいる。こちらの配慮に対して、何の心づかいもない人たちがいる。農家としては、このような人たちとは二度とは付き合わない。配慮のないこのような人とは、関係を持ちたくない。このような情緒的な価値を理解しない人達とは、関わりたくないのだ。品物が欲しいのではない。何らかの気持ちを物にのせて届けて欲しいのだ。

(あおの とよかず)



【備忘録】

「コミュニケーション資本主義」、 そして「文化社会」への変容、その1

—中西大輔「コミュニケーション資本主義と マクロマーケティングの意義」に学ぶ—

重本冬水

第24回市民科学研究会（駒澤大学にて）の第一報告は中西大輔さんの「コミュニケーション資本主義とマクロマーケティングの意義」でした。非常に刺激的でインパクトのある印象深い報告でした。本稿は、当日の中西報告と質疑応答に基づき、またレジュメ（パワーポイント資料40枚）をふまえ、その主な論点についての「備忘録」（忘れないように要点を書きとめておく私的メモ）といたします。また、報告は多岐にわたっていますので、今回は「その1」としてパワーポイント資料の1～12までの範囲を取り上げます。なお、以下での「」付きの文章は中西報告のレジュメで引用・紹介されている文章も含めています（以下、中西報告は「報告」と略記）。レジュメが必要な方は中西さんにご連絡ください。

<「コミュニケーション資本主義」とは>

最初に取り上げますのは「コミュニケーション資本主義」とは何かという点です。この論点では、「ネットワーク化されたコミュニケーション」は、資本の運動（価値増殖過程）にとって「中心的なメカニズムを成している事態」を意味しています。特に、「コミュニケーション資本主義」は「民主主義の使用価値」としてのコミュニケーション自体を「食い尽くす」、また「コミュニケーションを搾取する」と「報告」では捉えられています。この「食い尽くす」という表現は、「あらゆるオルタナティヴな通路を封殺」し、「資本が完全かつグローバルに社会をその体制に従属させる」ことを意味しています。そこにFacebook、Twitter、LINEなどのツールが機能するとするのです。

中西さんは「コミュニケーション資本主義」の4つの特徴を「①ビジネスの論理による計測、②情報空間内部のヒエラルヒー、③『公開性』のねじれの進行、④情動化するネットワークと象徴的能力の衰退」としています。この内容を私なりにまとめますと次のようになります。

“新自由主義の下でのネットワークは、コミュニケーションの循環の中での「経済的価値」が優先され、そのコミュニケーションの循環はGAFA（Google、Apple、Facebook、Amazon）を中心とする情報空間のヒエラルキーとして構築され、この下で「機密・秘密」、「監視、制御」が隅々まで行きわたります。このネットワークの特徴は「情動的」という点です。「情動的」とは感情表出の前の「身体の感応性を活性化させる」ことです。この「情動的ネットワーク」は「象徴的能力」（コミュニケーション合理性）を衰退させ、「社会文化」を「文化社会」として転倒させます。つまりGAFAによるコミュニケーションの循環の中で、社会をGAFAの「文化」が支配するということです”。

新自由主義の下でのネットワークは、かつての「ハイル・ヒトラー！（ヒトラー万歳）」、「天皇陛下万歳！」の「情動」が形態を変えて現われてきているような危険を私は感じます。この「情動」を生む構造と機能はその社会的形態を変えて再現しています。私には「GAFA 万歳！」というように思えます。

<情動化するネットワーク>

では、「情動化」とは何なのでしょう。「意識しないまま生起する現象、それが情動である」、「つまり意識する以前の段階で生起する現象が情動現象なのである」と紹介されています。私はかつて「幼児化社会」という表現を使ったことを思い出しました。

「客体（対象）としての社会と主体としての個人を二分法的に区切ることが出来ない社会の特徴は、一方で個人（主体）が社会（客体）に翻弄されているにもかかわらず、他方で個人（主体）が自己中心的となって社会（客体）を弄んでいるという点にある。それは、社会を対象化・相対化しえないが故に、また、しえない程度に依拠して、個人の自己中心的な意識と行動によって社会のあり様が成立しているという点にある。例えば、幼児が母親を含めた他の人間を対象化・相対化しえないが故に、他によって翻弄されつつも同時に自己中心的な見方（幼児なのだから当然だが）によって意欲し行動しているのに似ている。今日の社会（情報化社会）の特質は『幼児化社会』と言いうるものである」（重本直利『管理する情報―“情動的理性”批判―』こうち書房、1994年、170ページ）。

GAFA というネットワークによって翻弄されつつも、同時に、自己中心的な見方、つまり「報告」にある「他者による承認を求める、あるいは自己肯定感を満たしてくれる他者からの応答を求める自己呈示への欲求がある」ということなのだろうと思います。ここでも、かつての「ハイル・ヒトラー！（ヒトラー万歳）」、「天皇陛下万歳！」での「他者による承認」、「自己肯定感を満たす」、「自己呈示への欲求」が想起されます。

<欲望の無限拡大>

そして、この「情動化のネットワーク」は「象徴的能力の衰退」を招く、この論点を「報告」は以下のように述べています。

「イメージとなった言葉が感情を刺激する。・・・取るに足らないツイート、コメント、転送される些細なメッセージや哀願は、ごく小さな情動の塊を、そして過剰な享楽を、さらにそれに付随したほんの少しの注意を派生する」。

「この事態が、記号や言語の『象徴性の低下』という事態の核心である」とされ、「イメージとなった言葉」が人間の感情を刺激し、「情動の塊」、「過剰な享楽」などを生み出していくことによって、この記号や言語の「象徴性の低下」は起るということになります。そして、ここから「自己イメージの無限肥大」へとつながるとして「報告」は次のように述べます

「本来、自らの個性を見極めるためには、他者との比較が必要不可欠のはずです。他者と異なった側面を自覚できて初めて、そこに独自性の認識も生まれうるからです。自分と異なった他者が存在していなければ、何が自分の特質なのか判断のしようがないでしょう」。

「他者との比較」、「他者の存在」は考慮されないで、「自己イメージ」が拡大し、それは「無限肥大」となっていく、このことは、「現代の若者たちの多くに見受けられる内閉的な個性志向」であり、この志向では「おそらく満足の域に達することはありえない」となります。何故なら「個性とは本来は相対的なものであるはずなのに、内閉化した世界ではそれが絶対的なものとして感受されているからです」と「報告」は説明しています。

さらに、「しかも、その欲求は内閉的に高められていくので、自らの分限を知るための社会的な視座がそこには存在しません」、つまり「社会的な視座」の「準拠点がないので、個性への欲望だけが無限に拡大し続けることになるのです」と説明しています。危険極まりない社会文化現

象と私には思えます。平和にとっての危機、戦争拡大への道が大きく開かれている社会文化現象にも思えます。

<象徴的能力の衰退がもたらすもの>

「内閉的な個性志向」、「内閉化した世界」、いわゆる「引きこもり」が社会問題となっている日本の社会的病理を捉える必要を感じます。「HIKIKOMORI」(social withdrawal)は「KARÔSHI」(overwork death)と共に日本発の国際用語となっています。もちろん「引きこもり」は各国でも生じていますが、まだ社会問題化していません。日本がいち早く社会問題化し「HIKIKOMORI」という国際用語になりました。コミュニケーションの循環がGAFAによるネットワークに支配されるならば早晩多くの国で社会問題化することになると思います。その先駆けとして「引きこもり」が「HIKIKOMORI」の国際用語として通用することになったのでしょう。

「社会文化」の視座は今や「文化社会」の視座に包摂されつつあると思います。コミュニケーションの循環がGAFAによって支配されるならば、GAFAの「商業文化」(価値増殖過程文化)が社会を支配するという意味での「文化社会」です。それはもはや文化と言える代物ではありません。文化の物象化(reification)、物神性(fetishism)の極みです。これから私たちはこの「文化」と向き合わなければなりません。その覚悟が必要な時代を迎えています。「報告」は私たちにこのように訴えられているように思います。

<次号につづく>

<付記>

久々の東京での市民科学京都研究所の研究会が駒澤大学で開かれました。大学のキャンパスが以前と比べて大きく様変わりしていました。この10年余りの間に、多くの大学が建物の解体と新築を進め、昔のキャンパスの雰囲気が大きく変わってきました。早稲田大学、龍谷大学、立命館大学、同志社大学などは、訪れる機会があり、その都度大きな様変わりに戸惑うことがあります。多くの建物は大手の建設会社が請け負っており、その機能と構造は大学ごとの特徴をふまえてのものようですが、どこか通底する同一性が感じられます。かつて「コンクリートから人へ!」という政治的キャッチフレーズがありましたが、それに逆行するこの間の大学の建物を中心とした様変わりを大学評価の対象として考える必要があると思います。「建物から人へ!」という教育的・研究的キャッチフレーズが必要だと思います。建物が新しくなっていくことによって大学財政の構造は大きく変化しています。建設費と膨大な維持費(ランニングコスト)が生じ、他方、人件費の削減(不安定雇用の拡大と事務処理負担の増加を伴う)、そして教育・研究費の削減です。こうした中で教育・研究の内容・質もまた様変わりしつつあります。政府(特に文部科学省、経済産業省、防衛省関連など)の直接的・間接的な大学教育・研究への関与です。私は建物の新しさと共に、教育・研究の内容の空洞化と変質に危惧を感じます。駒澤大学で思い出すのは2008年のリーマンショックの際の資産運用上の膨大な損失です。その後どのように処理されたのか。大きく様変わりしたキャンパスを眺めながら振り返りました。

(しげもと　とうすい)

【インタビュー】

ザーラ・ヴァーゲンクネヒト（下）
（BSW [ザーラ・ヴァーゲンクネヒト同盟] 共同党首）



www.britte.de

掲載：「ベルリン新聞」2024年8月24/25日
聞き手：マクシミリアン・ベーア
アーニャ・ライヒ

照井日出喜・訳

——もしヴァーゲンクネヒトさんが外務大臣をなさるとすれば、アンナレーナ・ベアボック（訳注1）とは、何が違うことになりましょうか？

わたしならば、まずはドイツが再び、外交と調停を代弁する存在として国際的に認められる存在となるべく、努力するだろうと思います。要するに、なにやら指図をするが如き顔で世界を練り歩くようなことはしない、ということです。かつて、ブランド（訳注2）や、あるいはまたゲンシャー（訳注3）のもとでは、外交と調停とがドイツの外交の核をなすものでした。そういう意味で、わたしならば、ロシアとウクライナとの間の交渉をできるだけ早く開始させるべく、ブラジルと中国と話し合いを持つように努力することでしょう。こういうことは、あるいはアメリカ大統領になるかも知れぬトランプのような連中に任してはならないことです。ヨーロッパにとっては、この戦争ができるだけ早く終結に向かうことは、まさしく死活の問題なのです。

——ヴァーゲンクネヒトさんご自身、ウクライナとかロシアとかに赴き、和平のための交渉に尽力されるようなことがありますでしょうか？

自分に与えられている可能性というものについては、現実的に評価することが必要です。現在のわたしにあっては、そうした交渉に照応する権限や、ドイツ政府における後ろ盾があるわけはありませんから、いまは和平交渉の可能性を探るような立場にはありません。ただ、ハンガリーのオルバン首相がロシアへ、ウクライナへ、あるいはまた中国に赴いたことは、正しい判断だと思っています。

——ノルドストリーム・パイプラインの破壊（訳注4）に関わる最近の調査は、どういう意味を持っているのでしょうか？ ドイツの政治は、それに対していかなる態度を取るべきでしょうか？

この間、^{かん}相対的に明らかになってきたのは、ゼレンスキー大統領の了解のもとで、ウクライナの軍部がこの爆発を計画したのではないかと疑われることです。ただ、まだ明らかでないのは、ポーランドがその行為に関与していたか否かということです。しかし、ともあれその破壊工作は、明らかにドイツの危ういインフラストラクチャーに対する国家的テロリズムにほかなりません。しかもそれを行なった国が、ドイツが数十億ユーロ〔数千億円〕の税金（訳注5）によって援助している国なのです。ドイツの連邦政府が、このことについてまったくなんの意思表示もしていないということは、ただただその態度の卑屈さを露呈しているということであり、まさしく哑然とする以外にはありません。もちろん、かの破壊工作によって最大の利益を得るのはアメリカです。アメリカは、すでに以前から、彼らの高額な天然ガスをドイツに売りつけようとしていましたから。

——来月の3つの州議会選挙に戻りたいのですが、ザクセン、チューリンゲン、ブランデンブルクで、ヴァーゲンクネヒトさんが絶対に連立を組むことのない政党というのはあるのでしょうか？

わたしたちがこれまでつねづね言ってきたことは、わたしたちが、かのヘッケ氏（訳注6）と連立を組むことはない、ということです。

——しかし、ザクセン州、あるいはブランデンブルク州には、ビョルン・ヘッケという存在はありません。

もちろんです。しかし、それらの州にも、彼の陣営に属する人びとは十分過ぎるほど存在しています。マクシミリアン・クラウ（訳注7）は、ザクセン州で選挙戦に参加していますが、これはまたなんとも奇異な感を抱かせるものです。それというのも、彼は欧州議会のAfD議員の代表団に加わることが許されなかった人物であるにも関わらず、いまでは選挙戦のヒーローなのです。

から。これを見ると、どのような勢力がザクセン州の AfD を切り回しているか、よくわかるというものです。ただし、わたしたちは、他の諸政党とは違った形で AfD と付き合っていこうとは考えています。要するに、AfD から提案される法案に対して、すぐさますべてを反射的に拒否するような態度は取らない、ということです。そうした態度というのは、結局のところ、反対する諸勢力の短絡的な姿を世間に曝け出す、その可能性を彼らに与えることになるだけなのですから。

——ということは、法案を共同で通すこともあり得るということでしょうか？

共同で、というほどのことかどうかは、状況によるでしょう。じっさいのところ、チューリングェンでは、CDU は AfD の賛成票を得て、すでに幾つかの法案を通しています。それはべつに、いまに始まったことではありません。わたしたちが連立政権に加わることにならなければ、わたしたちの姿勢は連邦議会におけるそれと同じです——すなわち、提案されたものを検討し、支持するか否かを決定する、ということです。

——BSW と AfD の間の違いは、どこにあるのでしょうか？

このような質問が、CDU と AfD との間、あるいは FDP と AfD との間についてはけっしてなされないというのは、なんとも不思議なことです。CDU と FDP の経済政策や社会政策は、AfD のそれと多くの点で一致します——軍備の拡張を求める主張もそうです。AfD は、NATO の「2%目標」（訳注8）に賛成の立場に立っており、もとより平和主義政党などではありません。中東の紛争についても、彼らは戦争推進の立場にあります。

——移民・難民 [Migration] についての BSW と AfD の間の違いは、どこにあるのでしょうか？

もとよりわたしたちは、移民・難民に対するルサンチマンを煽り立てるようなこととは無縁です。わたしたちが主張するのは、現在のようなドイツへの大量の移住者（訳注9）は、すでに限界を越えていること、したがって、なんらかの適用すべき規則が必要だということです。本来、庇護権（Asylrecht）というのは、政治的に迫害されている人びとを庇護するためのものです。それは、誰もが入国でき、滞在することができる、ということを意味しているわけではありません。民族主義的な立場とは、もとよりまったく無関係です。

——ヴァーゲンクネヒトさんにとって、政党が連邦憲法擁護庁（Verfassungsschutz）の監視下になること、あるいはまたさらに、たとえばチューリングェン州における AfD のように、彼らに極右の政治組織という分類に入れられることは、意味を持つことでしょうか？

連邦憲法擁護庁という存在は、わたしにとっては、まじめに相手にできるような代物ではありません。わたし自身、長い年月、この連邦憲法擁護庁に監視の対象とされる政党〔左翼党〕に属していました。彼らは自分たちの勝手気儘な流儀で活動しており、つまりは独自の方針を持って動いています。まさしくそれゆえに、わたしたちは、ザクセンやチューリングェン、あるいはブランデンブルクの憲法擁護庁の州支部に対して、彼らの活動を掌握し、厳しく監視しようと思っているのです。とはいえ、ヘッケと彼の陣営が叫び立てる〔ナチスの〕民族主義的な「血と土のイデオロギー」が極右のものであるという断定には、べつに憲法擁護庁などは必要はありません。

——連邦憲法擁護庁の活動は、どのように監視することができるのでしょうか？

この組織のトップであるハルデンヴァンク氏（訳注10）が、合法的な言論であっても憲法擁護

庁が嗅ぎまわることを正当化する、という見解を持つのであれば、それは、ここでは憲法が擁護されているのではなく、憲法に疑念が持たれている、ということです。もちろん、わたしたちは、憲法擁護庁が勝手に動き回り、大勢順応への圧力を生むことのないよう、注意を集中していかなければなりません。

——最近書かれたご著書に明らかなように、ヴァーゲンクネヒトさんは、アイデンティティー政治というものをさほど重要視してはもらえないように思われます。しかし、テューリンゲン州では、公務員の職務における東部ドイツ人のクォータ制の導入を主張しておられます。これもアイデンティティー政治の一つではないでしょうか？

わたし自身、アイデンティティーを真剣にとらえることは重要な論点だとは考えています。しかし、現在、大都市のアカデミズム周辺で流行している woke (訳注 11) な議論には、いっさい、与するものではありません。そこでは、性的志向、血統、皮膚の色といったものが基本的な要因へと持ち上げられます。つまりは、社会的問題は消滅するのです。要するに、共通であるものではなく、分離されたものが、そこでは前面に出ることになります。

——ベルリンの壁の崩壊から 35 年が経ちましたが、人びとが東部ドイツ的である、ということ、どれほど長く続くのでしょうか？

東と西の間に差異が存在する限り、それは続きます。ある時点で生活諸関係が同等のものとなった時には、望むらくは、そうしたものは意味を失うでしょう (訳注 12)。

——東ドイツ [DDR (ドイツ民主共和国)] で過ごされた時間は、ヴァーゲンクネヒトさんにどのような影響を与えるものだったのでしょうか？

わたしが東ドイツで過ごしたのは子ども時代でした。それによって形成されたものは、もちろん、その後他の場所で生活するようになったからといって、消え去るものではありません。しかし、そのように形成されるものは、必ずしも東ドイツ [DDR (ドイツ民主共和国)] という国の性格にのみ関わるものではありません。東部ドイツで育った、東ドイツが消えた後のより若い世代であっても、たとえばバイエルン州に生まれた人びととは異なる議論の空間に生きているということです。

——具体的には、どういうことでしょうか？

東部ドイツには、外交への努力を主張するだけで「ブーチンの友人」などと言う人間は多くはありません。アメリカがミサイルをドイツに配置させれば、それがドイツの安全に有効と考える人はきわめて少ないでしょう。要するに、議論の道筋が異なるということです。じっさい、コロナの時期でも、東部ドイツ人は、ロックダウン政策に対して西部よりもはるかに頑強に抵抗していました。

——東ドイツ [DDR] で過ごされた青春時代というのは、ヴァーゲンクネヒトさんに、ロシアとパレスティナについての視角に影響を与えているのでしょうか？

当時の青少年はロシア語を学んでおり、ロシアにペン・フレンドを持っていることも多かったと思います。まだとても若い頃、わたしは何度か、休暇をロシアで過ごしたことがあります。しかし、それはべつに決定的ことではありません。たとえばガザ地区には、わたしは一度も足を踏み入れたことはありません。他方、イスラエルには、何年か前、一度、行ったことがあります。そこでは、パレスティナの人びとがイスラエルの入植者たちに排除されている地域も訪れました。しかし、わたしの見解自体は、東ドイツで過ごした経験とはほとんど無関係です。平和と外交のために努力するという立場であれば、ガザ地区で非戦闘員の市民たちが虐殺される状況を許すこ

とはできません。そこでイスラエルが行なっているのは、けっして防衛戦争などというものではなく、人びとに対する殲滅戦争にほかなりません。

——ただ、ハマス自体、非戦闘員の住民のただ中にイスラエルの人質たちを隠す行為を取ることによって、そうした殲滅戦争を挑発しています。

しかし、そこでは学校や病院が爆撃されているのです。それこそは、非戦闘員の住民たちに対する残虐きわまる戦争です。キエフがガザと同じような状態に叩き込まれることを想像してみてください。そのさいには、ドイツにおいても、凄まじい絶望の絶叫が全土に響き渡ることでしょう。それは戦争犯罪であり、そのことは国連も指摘しています。そうした行為を正当化することは不可能です。

——2023年10月7日には、ハマスによる虐殺がありました。その意味では、状況はウクライナとはまったく異なります。

しかし、それは4万人もの住民の犠牲者の存在を正当化するものではありません。

——ユダヤ人中央協議会の総裁であるヨーゼフ・シュースター（訳注13）は、ヴァーゲンクネヒトさんを、イスラエルへの憎悪を煽り立てる扇動者として非難しています。これについては、どう答えられますか？

ネタニエフ政権とその残酷な戦争の遂行を批判する多くのイスラエル人が存在しますが、彼らもまたイスラエルを憎悪する者たちでしょうか？ これはまったく愚にもつかぬ議論です。わたしはむしろ、ユダヤ人中央協議会が、女性や子どもたちに対する残虐な戦争に対して、なんらかの批判的な言辞を発して然るべきではなかったかと思っています。

（訳注1） アンナレーナ・ベアボック（Annalena Baerbock、1980～）。緑の党。現在の連邦政府の外務大臣。ちなみに、現在のオラフ・ショルツ内閣の閣僚は16名で、SPD（ドイツ社会民主党）が7名、緑の党が5名、FDP（自由民主党）が4名である。

（訳注2） ヴィリー・ブランド（Willy Brandt、1913～1992）。ドイツ連邦共和国（旧西ドイツ）の政治家。第4代連邦首相（1969 - 1974）。ドイツ社会民主党（SPD）党首（1964～1987）。1957年から1966年まで、ベルリン市長。1966年から1969年までのキージンガー内閣では、外務大臣と副首相を務める。新設されたベルリン郊外の国際空港は、彼の名を冠している。

（訳注3） ハンスーディートリッヒ・ゲンシャー（Hans-Dietrich Genscher、1927～2016）。ドイツ連邦共和国の政治家。自由民主党（FDP）の党首。1974年から1982年まではドイツ社会民主党（SPD）のヘルムート・シュミット、1982年から1992年まではキリスト教民主同盟（CDU）のヘルムート・コールとの連立政権で、1974年から1992年まで連邦副首相兼外務大臣を務める。外相在任期間は18年に及ぶ。

（訳注4） 2022年9月26日、ヨーロッパとロシアを結ぶガスパイプラインのうちの2つ、ノルドストリーム1（NS1）とノルドストリーム2（NS2）天然ガスパイプラインで4カ所の水中爆発が起き、ガス漏れが発生した事件。破壊工作の関与については、「ロシア説」「ウクライナ説」「アメリカ説」等々、こうした国家謀略的事件には付き物の多くの「観測」がなされているが、いまだ十分に解明されてはいないとされている。しかし、2024年9月26日の「ベルリーナー・モルゲンポスト」紙によれば、8月の中旬にいたって、ウクライナの関与を疑わせる方向で、再び捜査が進展しているとのことである（[Nord Stream: Anschlag](#)

[offenbar von Ukraine-Befehlshaber autorisiert \(morgenpost.de\)](#))。

(訳注 5) ドイツ政府の公式の発表によれば、ウクライナに対して、「2022 年の 2 月 24 日のロシアによる侵略以降、ドイツは、人道支援、直接的な支払いおよび武器供与によって、総額 350 億ユーロ [約 5 兆 6000 億円] の支援を行なっている」 ([So unterstützt Deutschland die Ukraine | Bundesregierung](#)) とのことである。これだけの膨大な予算が蕩尽されているのであれば、ドイツの現在の経済的な苦境、格差社会の拡大といった深刻な問題の根源の一端がどこにあるか、明白であるように見える (なお、ドイツの 2024 年予算は総額 4,768 億ユーロ [約 78 兆円] である)。

(訳注 6) ビョルン・ヘッケ (Björn Höcke、1972～)。極右の AfD (ドイツのためのオルターナティブ) の政治家。2014 年以降、テューリンゲン州議会における AfD 会派代表。

(訳注 7) マクシミリアン・クラール (Maximilian Krah、1977～)。AfD に所属する弁護士。2024 年の欧州議会選挙において、彼は AfD の最上位候補者であったが、彼をめぐるさまざまな軋轢のゆえに、2024 年 5 月、欧州議会における右派の ID (Identität und Demokratie [アイデンティティーとデモクラシー] 会派から AfD の議員は全員除名され、クラールは、AfD の連邦委員会から離脱するとともに、欧州議会の選挙戦に参加することが禁止される。

(訳注 8) 国防費を GDP の 2%以上に増額せよという、加盟諸国に対する NATO の要請 (命令)。2024 年には、32 の加盟国のうち 23 カ国がその「目標」に到達するとされており、2035 年にはすべての加盟国がその要請を満たすことが予想されている。NATO のみならず、世界の軍事費の増大は年を追うごとに著しく (とりわけロシアのウクライナ侵略以降)、2023 年には 2 兆 4430 億ドル、日本円で 377 兆円余に達しているといわれている ([NATO 加盟国 急増する国防費 \(油井'sVIEW\) - 国際報道 2024 - NHK](#))。

(訳注 9) 「通信」の先月号の拙論 (「東・西ドイツの差異・小論 (II)」) でも触れられているように、ドイツへの移民・難民は、ウクライナからの 118 万人の戦争難民を含めて 350 万人に迫る勢いと報じられている。現在の政治に対する鬱積した不満、「信号機連立政権」に対する根強い不信感を惹き起こす原因には、当然、ウクライナ侵略戦争に引きずり込まれた現状に対する救い難い絶望感があることも否定できないが、ただ、ウクライナからの膨大な戦争難民については、それを公けに批判もしくは非難することはいわばタブーであり、それゆえにこそ逆に、シリア等からの難民・移民に向けられる反感の念が膨張し、AfD へと票が雪崩を打っているかのようにも、わたしには思われる。

(訳注 10) トーマス・ハルデンヴァンク (Thomas Haldenwang、1960～)。CDU。2018 年 9 月以降、連 4 邦憲法擁護庁長官。

(訳注 11) ”woke”は、wake の過去・過去分詞であるが、近年は、一種特別なスラングとして、「元々、それは社会の正義に反すること、特に人種的偏見に関することに対して、注意を払う『目を光らせる』ことを意味する口語表現であり、アフリカ系米国人が日々直面する、生活のあらゆる部分に浸透した偏見に光を当てるために使われた用語だった。そしてそれは、そのような逆境に対して常に情報を得て、気を配り、積極的に立ち向かう必要があることを強調している」 [意識高い系の言葉「woke」についてみんなが誤解していること | Forbes JAPAN 公式サイト \(フォーブス ジャパン\)](#)。しかし、最近では、社会的な姿勢における「左派への志向」の傾向を示すものではなくなっているとされている。

(訳注 12) ヨーゼフ・シュースター (Josef Schuster、1954～)。医師。2014 年以降、ドイツ・ユダヤ人中央協議会総裁。ユダヤ人中央協議会が組織するメンバーは、23 の州支部と 104 のユダヤ人教区の 91,839 名である ([Zentralrat der Juden: Über uns](#))。

(てるい ひでき)

グレゴール・ギジ・インタビュー

照井 日出喜 記



plus.tagesspiegel.de

ドイツ左翼党・グレゴール・ギジ（1948～）は、1989年のベルリンの壁の消滅以降、PDS（民主的社会主義党）を経て、SPD（ドイツ民主党）左派のオスカー・ラフォンテーヌ（1943～）とともに左翼党を結成し、機知とユーモアに富み、誠実に自己とみずからの党の分析を行なう論客として、紆余曲折を経ながらも数十年の長きに渡って活動を展開してきた、ドイツの代表的な左翼的パーソナリティーの一人である。ラフォンテーヌは、すでにギジとは袂を分かち、2024年の1月、左翼党から分裂して（除名されて）結成された「ザーラ・ヴァーゲンクネヒト同盟」（BSW）の実質的なブレーンの一人となっている（ザーラ・ヴァーゲンクネヒトは、プライベートではラフォンテーヌ夫人である）のに対して、グレゴール・ギジは、左翼党の一員として、なお一定の影響を持つ人物である。

BSWの著しい台頭とは逆に、左翼党は今年9月の3つの州議会選挙でも苦しい戦いとなり、現在の各種選挙に向けての世論調査では、おそらく今後、ベルリン市州とチューリンゲン州以外の地域では議席を得るのは難しいのではないかとさえ思われる状況にある。

BSWと左翼党が、それぞれいかなる政治的航路を描いていくかはともかくとして、ギジの存在が、「ドイツ統一」後の35年間の体制批判的運動に本質的な役割を果たしたことは事実である。

以下は、今年の8月31日の「ノイエ・チューリッヒャー新聞」に掲載された、Gregor Gysi: «Menschen radikalisieren sich aus Langeweile»（「グレゴール・ギジ：人は退屈ゆえに急進化するもの」）([Migration, AfD-Wahl und Zukunft der Demokratie: Gespräch mit Gregor Gysi \(nzz.ch\)](https://www.nzz.ch/migration/afD-Wahl-und-Zukunft-der-Demokratie-Gesprach-mit-Gregor-Gysi-nzz.ch)) を訳出したものである。

インタビュアー：サーシャ・バティアニー（Sacha Batthyany）。

【記者】

東部ドイツでは極右政党の AfD（極右政党「ドイツのためのオルターナティブ」）が勝利し、西部ドイツでは、移民問題にどう対処すべきかで争いが続く：ドイツはどうなっているのか？ ドイツの政界の代表的人物とのインタビュー。

（「ノイエ・チューリッハー新聞」編集部）

ギジさんは、東部ドイツに詳しい方として知られています。ギジさんが、テューリゲン州やザクセン州の、有権者の 60%以上が AfD に投票する村々を訪れる時、こうした東部ドイツを、なおよく理解することができますでしょうか？

東部ドイツの人間には、要するにフラストレーションが溜まっているのです。これは、かつてのドイツ再統一という出産のさいの失敗にまで 溯^{さかのぼ}るものです。あの当時、東ドイツ〔DDR（ドイツ民主共和国）〕は、ただただ SED〔ドイツ社会主義統一党〕、シュタージ〔国家保安省〕、そしてベルリンの壁がもたらした死者たちのみに還元され、そこに生きた人びとの生活状況については一顧だにされませんでした。しかし、東ドイツ〔DDR〕にあっては、幾つかの点で西側を凌駕するものがありました。たとえば男女平等の実現はその典型です。この国におけるそうした優位性は、一度として認められることはなく、それは、この国に生きた者たちの自尊心を深く傷つけることになりました。要するに、東部ドイツには” 当てつけの精神（Daffke-Haltung）”（訳注 1）が蔓延しているということです。

いま、なんとおっしゃいました？

彼らにとって重要なのは、せめてもの鬱憤晴らしだ、既成政党の奴らを困らせてやれ、ということなのであり、したがって AfD に入れるということです。

友人の方に、AfD に投票される方はおられますか？

いいえ、おりません。しかし、もしかしてわたしの親戚筋には、一人か二人、いるかも知れません。子どもたちは、違いますが。

テューリンゲン州とザクセン州は、今日（9月1日）が州議会選挙の投票日で、数週間後には、ブランデンブルク州の選挙が待っています。AfD は、大方の予想では、最大の勝利者となるだろうと言われています。じっさい、すでに「褐色の東部ドイツ」〔褐色はファシズムの象徴〕という言い方さえされています。ドイツの民主主義は危険の淵にある、ということです。それは正しい判断でしょうか？

問題は、彼らの選挙結果によってどのような連立政権が成立するのか、そしてまた、もし仮りに AfD がいつの日か州政権という責任を担うことになった時に、極右である AfD がどのような

態度でそれを果たすことになるか、ということです。もちろん、何人かが言うように、AfD が権力の座に就くことになれば、全体に態度が軟化するということは可能かも知れませんが、しかし、それは確かなことではありません。けっして忘れてはならないのは、この党は、極右特有の発想に対してみずからを限定するようなことは一度としてなかったということです。たとえば最近、ビョルン・ヘッケ（訳注2）は、上から下に向けての再配分などというものは必要ではない、必要なのは、非ドイツ人たちからのドイツ人への再配分である、などと述べていますが、これこそはまさしく古典的なナチスの言葉にほかならず、そして、AfD は、こうした見解を持つことを許容する党なのです。ちなみに、アドルフ・ヒットラーは、「わたしに権力の座をもたらしたのは民主主義である。そして、わたしはその民主主義を叩き潰した」と述べています。

とはいえ、わたしたちは1933年に生きているわけではありません。

それはそうです。今度の東部ドイツの州議会選挙そのものが、ドイツを根幹から危険に曝すわけではありません。民主主義に対してじっさいの危険をもたらす恐れがあるのは、ドナルド・トランプが大統領選挙で再選されることです。彼は、中国の同僚である習近平には何事も意のままに采配できるのに対して、自分は議会や自由なメディアによって行動が制約されていることに怒りの念を抱いています。トランプは、民主主義的でもなければ自由の理念に基づいて構築されてもいない権威主義的国家が効率性の高いものと考えていますが、ヴィクトル・オルバーン（訳注3）や AfD も、紛う方なくその類いです。もしこうした勢力が、ヨーロッパとアメリカ合衆国でますます成功を収めるようになれば、その時には、わたしたちの民主主義はじっさいに危険に曝されることになります。

ギジさんも、AfD は禁止すべきという意見に賛同されますか？

こういうものは、禁止したからといって問題が消えるわけではありません。くわえて、それを決定するのは連邦憲法裁判所のみです（訳注4）。

右翼ポピュリズムに対する最上の戦術というのは、どのようなものでしょうか？

人びとはグローバリゼーションというものに不安を抱いているのであり、まさしくこのことが、右翼的な傾向が再び強まっていることの背景にあります。グローバリゼーションというものの自体、なにやら不気味なものを持っています——それというのも、誰が何を決定しているのか、もはや誰にもわからないからです。要するに、以前ならば、かつていっしょに通学していた市長だったでしょうが、現在では世界保健機構（WHO）がそれに当たる、といった具合です。わたしたちは、人びとが民主主義を体得することができるような運動を展開することをしませんでした。民主主義が存在しない時には、人間の生活がどのようなものになるか、説明することもしないままでした。くわえて、わたしたちは、グローバリゼーションとはいかなるものか、その本質について説明することもしませんでした。

多くの人びとにとって、眼前にある諸問題は、過大な、その理解が荷の重いものとなっているのは当然の帰結であり、それゆえ、人びとはポピュリストたちの餌食となっているのです。

東部ドイツの人びとには、何にもまして移民・難民問題が過大なものとして立ちふさがっています。

新聞で、一人のシリア人が女性を襲ったという記事を読むと、そうした人間は例外であるにも

関わらず、彼らは皆、そういう人間なのだと考える——こういうことに関しても、ドイツの政策は誤りを犯しています。すなわち、難民たちはどこかドイツの地の仮設住宅のような所に座ったままで、労働許可証を手にするにはないのですが、しかし、労働以上に社会への統合に効果を発揮するものではありません。しかし、わたしたちは、彼らをただひたすら待たせたまま、越えがたく分厚い官僚主義的な障害を次から次へと作り上げて労働から遠ざけることで、ついには、彼らは退屈のゆえにラディカルな行動へと走るようになるのです。

人びとがラディカルな行動へと走るのは、ドイツの管轄官庁のゆえ、ということになるのでしょうか？

そうした状況にある人びとにとっては、労働の機会がなく、要するに必要とされていない、ということが最悪のことなのです。人びとは社会における役割とみずからのアイデンティティーというものを喪失するのですから。

ゾーリングゲンの襲撃事件（訳注5）のことをお聞きになった時、この事件は AfD が利用するだろうと思いいになりました？

そうです、残念ながら。

ギジさんの党である左翼党は、東部ドイツで凋落の一途を辿るかに見えます。何が誤りだったのでしょうか？

わたしたちが犯した誤りは、じっさい、多岐に渡ります。わたしたちは、あまりにも西部ドイツに、つまりは西部ドイツの都市に、運動の方向を集中させてしまい、それゆえ、東部ドイツに十分な配慮を行なわなかった、ということがあります。かつてのわたしたちの党は、きわめて多くの庶民の人びとの支持を獲得していることに、党としての勢力の根源を持っていましたが、近年では、そうしたことには成功していませんでした。この前の党大会のさい、わたしたちは男女平等について議論を戦わせましたが、2時間どころではなく、終日、それを続けていました。あの時点で、左翼党はすでに存在の危機に瀕していたと言えます。たとえば欧州議会に左翼党の議員として入った、環境活動家のカローラ・ラケーテ（訳注6）のような人物は、東部ドイツの人びとには限定的な共感しか得ることはできませんでした。

その一方で、ギジさんがかつて共に戦ったザーラ・ヴァーゲンクネヒトは、東部ドイツの人びとからの共感が得られています。彼女は、創立したばかりの新しい政党、ザーラ・ヴァーゲンクネヒト同盟によって、東部ドイツの政治状況を再編成し、ギジさんたち、つまりは左翼党から票をかつ攫うかに見えます。ギジさんのライフワークは、危機的な状況に陥っています。

わたしのライフワークと言えるものを、わたしはすでに終えています——それはすなわち、ドイツ統一にいたる道筋を見出すことのできなかった東部ドイツ人たちの立場を主張することです。わたしは、ドイツ統一に反対の立場を取った人びと、あるいは、じっさいに受け取った成果よりはるかに多くのものを期待し、裏切られた人びとのために、力を尽くしたつもりです。

ザーラ・ヴァーゲンクネヒト同盟は、じつに奇妙な混交から成り立っています。ヴァーゲンクネヒトの難民政策・ヨーロッパ政策は右翼的であり、その経済政策は、かつての連邦首相ルートヴィヒ・エアハルト（訳注7）のそれに照応するものであり、その社会政策は左翼的です。つまり

は、この政党は、これらの諸政策を合算して成立しているということであり、たしかにそれは、いまのところ成功しているかに見えます。しかし、わたし自身は、その成功が長く続くとは思っておりません。

ヴァーゲンクネヒトとは、いつ、最後に電話でお話しになりました？ その時は、氷のように冷ややかなトーンだったでしょうか？

いえ、わたしたちは連邦議会で遠くから挨拶を交わしました。

【グレゴール・ギジ】

ドイツ民主共和国（DDR）では、当時、最年少の弁護士であり、その後、左翼党の党首を務めるとともに、さまざまなトークショーでは常連のゲストであった。彼は、ドイツ連邦議会の最も優れた雄弁家としても知られ、その卓越した演説のゆえに、彼に敵対する陣営の人びとさえもが、それには喜んで耳を傾けるほどであった。彼の党である左翼党は、東部ドイツにおける最近の選挙結果に明らかなように、その未来は不確実なものとなっている。

（「ノイエ・チューリッシャー新聞」編集部）

ところで、ギジさんは、牛の飼育者として正規の教育を受けた方である旨、読んだことがあります。政治における頓馬な牛（訳注8）とか、強情で人の言うことをきかない乳牛とかと付き合ううえで、以前に受けたそうした教育は役に立ちますでしょうか？

はい、もちろんです。わたしは搾乳もできますが、より重要なことは、飼育場の整理や清掃の仕方についても学んだことです。愚かな雄牛（訳注9）とどう付き合うかを習得することも、政治の世界で生き延びていくためには、最も重要な前提となるものです。

ドイツの政治における最大の愚かな雄牛とは？

それは言わないでおきましょう。それを言うと、わたしは首にお尋ね者の札を下げなくてはならなくなりますから・・・

ギジさんは、どのような時に、ご自身が東部ドイツ人であるとお感じになりますか？

誰かがわたしに、「東の連中というのは、少し頭がおかしいね。選挙では変な政党に入れるうえに、考えることも、くっちゃべることもまともじゃないからね」と言ったとしましょう。その時には、わたしはそれに対して反対弁論を展開する弁護士になります。

オッシー〔Ossis（東部ドイツ人）〕とヴェッシー〔Wessis（西部ドイツ人）〕との間の亀裂は、統一から35年を経て、ますます大きくなっているように見えます。間違っているのでしょうか？

そのことは、わたしにとっても不思議です。

ギジさんはかつて、自分が連邦議会に別れを告げるのは、東と西との間に対等な関係が出来上がった時だ、と言われました。ということは、ギジさんは永遠に働かなければならないということになります。それにしても、この亀裂は、いったい、どこから来るのでしょうか？

〔「統一」以後の〕人びとの相互に対する無関心の風潮ゆえです。

一つのエピソードをお話ししましょう。ある時わたしは、わたしたちのドライバーの両親が住む、東部ドイツのとある村に行ったことがありました。彼の両親に、いま不足していると感ずるものは何かと尋ねると、彼の母は、「コンズム〔Konsum〕」（消費協同組合〔Konsumgenossenschaft〕）（訳注10）、居酒屋、農業生産協同組合（LPG〔Landwirtschaftliche Produktionsgenossenschaft〕）（訳注11）の集会、と答えてくれました。「コンズム」では、買い物のたびに女性たちが楽しいお喋りに花を咲かせ、居酒屋では、男たちが毎晩、ビールを2本ぐらい飲んで過ごすのがつねであり、LPGの集会では、終わると賑やかなダンス・パーティーが開かれていました。いまは、スーパーマーケットと居酒屋は8キロ先にあり、ダンス・パーティーも、もはや消えてしまいました。わたしが、隣人たちのパーティーとかに自分から押しかけて行くことはないのですか、と尋ねると、彼女は、「いえ、いまはそんなことをする人はいません。せいぜい大晦日だけです」と答えました。

わたしがこのエピソードで何を言いたかったと言いますと、要するに、ある種の事は、それらが無くなってはじめて、社会全体にとり、そしてまた特定の個人自身にとって、いかに重要なものであったかを知ることになる、ということです。

わたしのようなスイスに住む人間の視角からすれば理解し難いことですが、ウクライナ戦争に対する東部ドイツの人びとは、どちらかと言えばプーチンの側にあるように思われます。しかし、東ドイツ〔DDR〕に生きた彼らは、数十年に渡って、強権主義的なソ連支配のもとで苦しんでいたはずなのですが。

わたしが子どもだった頃、つまりは1950年代ですが、その時期には、ロシア人に対する東ドイツと西ドイツの人びとの拒絶の感情は、同じような強さを持っていました。しかし、1960年のベルリンの壁の建設以降、事態は変わります。人びとはソ連に旅行するようになり、その家族たちとも知り合いになることで、思いがけなくも親近感を抱くようになりました。そして、もとよりゴルバチョフの登場です。彼の人気は大変なものでした。そうした意味では、東部ドイツにおいては、ロシアに対する基本的な理解が異なるということです。いまでもさまざまな集会で、NATOはますますロシアの攻撃的なやり方に似てきているのではないか、だからプーチンは自分を頑なに守ろうとしているのだ、という異議の声を、よく耳にします。

ギジさんは、たとえば反体制派活動家の毒殺未遂の疑いが出たさい（訳注12）など、プーチンを擁護する側に立っておられました。プーチンに対するギジさんの対応は、ナイーヴだったのでしょうか？

わたし自身は、よもや彼がそのようなことを決断するとは思っていなかったのですが、ウクライナに対する侵略戦争は、彼に対する完全な決別を意味しました。わたしは、その安全保障上の利害を貫徹するためには、戦争にいたらずとも、彼には別の可能性もあったと思うのですが、しかし彼は、ソヴィエト連邦の崩壊という事態を、どうしても受け入れることはできない、ということです。エストニア、リトアニア、ラトヴィアは、すでに彼から離反しており、旧ソ連から残ったそれ以外の幾つかの国については、彼の管轄領域から逃れることは絶対に許さな

いのです。

ギジさんにとって、東ドイツ〔DDR〕にあったもので、それが失われたことをいまなお惜しく思うものはおありでしょうか——湿原のなかの人工池でのヌーディスト・クラブを別とすればですが。

そうしたヌーディスト・クラブとは、わたしはすでにはるか以前から無関係ですが、しかしもちろん、東ドイツから消えたもので悲しく思われるものは、幾つかあります。社会的安定の形態が確保されていたこと——たとえば、芸術家の存在の安定がそうでした。現在は、それはただただ夢のまた夢です。さらには、ささやかな事ではありますが、たとえば法廷において、それが適切だと判断された場合、あるいは、高齢者や絶望的な苦境にある人びとの場合には、例外を認めて裁定を下す、というようなことが行なわれたことです。

当時の東ドイツ〔DDR〕での生活は、今日、郷愁をそそるものとして美化されるのでしょうか？

もちろんです。すべての人びとが自分の子ども時代を美化するように、東ドイツもまた、過ぎ去ったいまとなって、美化されるのです。しかし、まさしくそのことには注意しなければなりません。

1988年に、ギジさんははじめて東側を出て、パリに行かれました。どのようなささいなことに、そこでは気が付かれたのでしょうか？

各種多彩な車が走っていること、華やかな店の数々、それからレストランですが、そこでは、どこでもわたしの好きな所に席を取ることができ、〔東ドイツのレストランのように〕ウェーターやウェイトレスに案内されて席に就く必要がない、ということでした。それからわたしは、政府を激しく糾弾することの許される集会を体験しました。すばらしい体験でした。

西側の世界で反発を感じたのは、何だったのでしょうか？

《モナリザ》を見ようと、地下鉄でルーヴル美術館へ行き、入場券を買ったのですが——そこでわたしは文無しになりました。じっさい、当時、たとえばドレスデンの古典絵画館に公共交通機関で行こうとすれば、ほとんどお金がかかるわけではありませんでした。その時、わたしの脳裏に浮かんできたのは、教育、芸術、文化とスポーツに対して、すべての子どもたちや青少年が同等のチャンスを持たなければならぬ、ということであり、それは、わたしが今日にいたるまで絶えず闘ってきたことでもあります。

ギジさんは、東ドイツ〔DDR〕における弁護士として、国家権力の近くにおられ、すべてのことを目にされました。かの社会主義的農民国家において、忌むべき害悪が集中した残酷な事態は、何だったのでしょうか？

東ドイツに批判的な『オルターナティヴ』を書き、8年の刑を言い渡されたルドルフ・バーロ（訳注13）に対する判決です。わたしはまさしくその時、国家権力の絶対的威力と恣意性を思い知らされました。ともかくわたしは、彼ができるだけ早く釈放されるべく、ひたすら奔走していました。

そうしたすべてのことにも関わらず、やはり東部ドイツは、ギジさんの故郷なのではないでしょうか？

わたしの故郷はベルリンです。

それでは、なにか一つのエピソードで、ベルリンを説明していただけますか？

もちろん、これこそがベルリンの唯一のエピソード、というものはありません。多彩なエピソードがあり、多彩なベルリンがあります。

何年か前のことですが、さまざまな理由から、連邦議会の同僚である CSU（キリスト教社会同盟——バイエルン州の地方政党）の議員と 1 台のタクシーに同乗することになりました。不思議な偶然と言うべきか、その時の運転手は、今日ではとんと見かけることのなくなった、高齢の生粋のベルリン人でした。わたしの同僚は、乗ってからすぐさま、早く目的地に着くにはどの道を通るべきか、彼に説明し始めました。しかし、その運転手は、いっこうに聞き入れる様子も見せません。そこで、業を煮やしたわたしの同僚が、「いま、誰を乗せて運転しているか、あなたにはおわかりにならないようですね」と言うと、運転する彼は後ろを振り向いてわたしたちを眺め、「わたしゃ前には、もっとまじな連中を運んだことがあるがね」と答えました。それがベルリンです。

ベルリンの壁が崩壊した夜（1989 年 11 月 9 日）、ギジさんは何をしておられましたか？

眠っていました。当時のわたしの伴侶がわたしを起こして、いっしょに西ベルリンへ行ってみよう、壁が開いたから、と言うので、わたしは、「夜中の 2 時に冗談は言わないものだよ」と答えたのですが、すぐにテレビを見て、何が起きたかを悟りました。しかし、わたしはベッドに入ったままでした。

ギジさんは、歴史的な事件を寝過ごされたのですよね。ともあれ、ベルリンの壁が崩壊するのは、歴史上、一度きりの事件ですから。

わたしには、翌日の朝 8 時に公判がありました。そこでわたしは、殺人に関わる訴訟の被告を弁護することになっていました。ともあれ、ドイツの司法というのは、そうした歴史的イベントが起こったとしても、それによって公判が中止になるようなことはないものなのです。

かつて、ギジさんご自身が国家保安省（シュタージ）のために働いていたのではないかと、という非難の声巻き上がったことがあります。しかしそれは、法的に一度も立証されたことはありませんでした。逆に近年では、ギジさんは、ドイツの最も人気のある政治家たちの一人に選ばれておられます。どのように思われますか？

要するに、人びとはわたしという人間に慣れた、ということでしょう。それと、わたしは比較的正直にものを言うタイプで、そのことは、トークショーのなかで、質問に対して、政党の決議の如くあれこれ考えたりはせず、当意即妙に答えを返すことでも明らかなのかも知れません。そうしたことを、人びとは理解してくれているのでしょう。

それには、ご著書のタイトルである、『真実よりも多数が重要であるがゆえに、政治

家が語らぬこと』が妥当します。換言すれば、選挙で勝利する者は、最も多く嘘をつく者、ということになるのでしょうか？

いえ、逆の推論は必ずしも妥当しません。しかし、政治家たちにとっては、真実であるよりも多数であることがより重要なのであり、それがわたしの非難するところなのです。

現在の政治不信というのは、ここに由来するのでしょうか？ 東部ドイツでは、選挙区によっては、SPD〔ドイツ民主党〕と緑の党は得票率が5%を切っており、FDP〔ドイツ自由民主党〕は、存在しないに等しい状態です。

政治家というのは、自分たちの政治的な決定に対して、高尚ではあるが、しかし真実ではない理由を挙げるのがつねです。人びとは、しだいにそれに気がつくことになるのです。くわえて、後になって、すべてが、それまでの説明とはまったく異なる背景を持つものであったことが明るみに出ることもあります。さらには、政治家は、多くの場合、誤った言語を用いて話すうえに、まったく内容を説明することがないままに、たとえば譲渡利潤税などというものについて語るのです。

コール（訳注14）は、ドイツ統一のさいに、「（東ドイツには）華やかに繁栄した風景が広がる」ことを約束しました。彼は、わかっていて嘘を言ったのでしょうか？

それは、わたしにはわかりません。彼がそれをほんとうに信じていたとしたら、わたしは彼をナイーヴだと言いますが、彼がそれを信じてもないのに言ったとしたら、たしかに嘘つきとか言いようがありません。しかし、彼はそれによって多数の有権者を獲得したのです。オスカー・ラフォンテーヌ（訳注15）は、「統一はきわめて高くつくだろう」と警告し、そして敗れました。

政治不信は、なぜコロナとともに激しくなったのでしょうか？

わたしが思うに、すでにコロナ以前から始まっていました。すなわち、多数の難民が押し寄せた2015年の夏以降です。あの時、アンゲラ・メルケル（訳注16）は、「大丈夫。われわれはやり遂げます」と言ったのですが、それがAfDの成功に向けてのスタートの号砲でした。

ギジさんは、当時、メルケルのこの言葉を聞いて、どうお思いになったでしょう？

わたしも彼女と同じように、それは処理できることと思っていました。ただ、ここでの問題は、それまでつねに行なわれていた安全対策や背後関係のチェックが実施されなかったということです。まさしくそれゆえに、ベルリンにおいても襲撃事件（訳注17）が発生したのです。

メルケルは、いま、この言葉についてどう思っているのでしょうか？

わかりません。彼女はそのことについてはなにも言いませんから。

ギジさんは、ご自身の一生をドイツの政治のために犠牲にされました。そしてまた、扶養権を持っておられた息子さんのことも、十分に顧みることはできませんでした。このことについて、良心の呵責を感じておられますか？

いえ、わたしは自分の一生のすべてを政治のために犠牲に供したわけではありません。わたしが政治の世界に入ったのは、42歳の時でした。ただ、その初めの時期、あまりにも政治のために時間を取られることが多くなったために、息子のための時間が少なくなりました。それは、今日にいたるまで、わたしの心を苛んでいます。あの頃のわたしには、毎日、18ぐらいのアポイントメントがありました。

一日に18ものアポがある生活では、ご自分が重要な存在だと感じることで、ある種の陶酔感のようなものがあるのでしょうか？

いえいえ、ただただ忙しく、右往左往して走り回っているだけです。

ギジさんは、今日、自分はもはや誰からも必要とされないのではないか、という不安を感じられることはありますか？

多分、あるかも知れません。わたしは離婚していますから、そうでなければ必要ではなかったであろうと思われるような、いろいろな予定もこなさなければなりません。

ドイツの政治は、ギジさんを必要としているのでしょうか、あるいは、ギジさんは、ドイツの政治を必要としておられますか？

わたしには、ドイツの政治は必要なものではありません。じっさい、かつてわたしは3年間、政治から離れて長い休暇を取ったことがあります。べつに不自由は感じませんでした。もっとも、ドイツの政治がわたしの存在を必要としているとは思いますが、しかし、それを理解することはないでしょう。

ギジさんのこれまでの政治家としての一生を振り返りますと、数多くの選挙戦があり、いつも同じような調子の座談会があり、骨の折れる面倒な仕事の数々があり、それらはまた、肉体的にもさまざまな傷跡を残しました。ギジさんは、何度かの心筋梗塞、脳卒中、動脈瘤といった、重篤な病魔の数々に襲われ、さらには、離婚ということも経験されました。これらのすべては報われることになったのでしょうか？

いえ、もちろん、そのようなことはありません。もしわたしが今日、1989年に党の委員長をやる気があるかと、もう一度、問われるとすれば、いいえ、お断りします、と答えることになるでしょう。

(訳注1) “Daffke” は、ベルリン特有のスラングで、「当てつけに～する」「腹いせに～する」といった意味で使われるとのことである。要するに、自分の票がどのような帰結をもたらすか、などということは考えず、ただ不満と憤怒の情から AfD に投票する、というようなニュアンスであろう。

(訳注2) ビョルン・ヘッケ (Björn Höcke、1972～)。チューリンゲン州議会 AfD 会派代表。彼は、たんにチューリンゲン州のみならず、AfD のなかで相対的に大きな影響力を持つ人物と目されている。

- (訳注 3) ヴィクトル・オルバーン (Viktor Orban、1963～)。ハンガリー首相。権威主義と民族主義を掲げるフィデス・市民同盟 (Fidesz-Magyar Polgári Szövetség) 党首。ロシアや中国といった権威主義体制国家との関係を深めていると伝えられ、ハンガリーが EU の一員であることから、他の EU 加盟諸国との間でさまざまな軋轢も生じている。
- (訳注 4) AfD の禁止を憲法裁判所に求める連邦議会議員の動きは、今春から始まっているとされ、CDU/CSU (キリスト教民主・社会同盟)、SPD (社会民主党)、左翼党、緑の党の議員有志が加わっている ([Bundestagsabgeordnete planen AfD-Verbotsverfahren | tagesschau.de](https://www.tagesschau.de/inland/bundestag-abgeordnete-afd-verbot-verfahren-101.html))。しかし、シヨルツ首相をはじめ、CDU/CSU の党首たちもいずれも反対であり、SPD のゲジネ・シュヴァンハートは、AfD があたかも殉教者気取りで行動するのではないかという危惧を表明した ([AfD-Verbot? Bundestagsparteien machen nächsten Vorstoß \(ruhr24.de\)](https://www.ruhr24.de/afd-verbot-bundestag-parteien-nachsten-vorstoess-101.html))。ヴァーゲンクネヒトは、「これは、今年出された最も愚かな動議」として、痛烈に批判している ([Wagenknecht prangert AfD-Verbot an – „Dümmster Antrag des Jahres“ \(msn.com\)](https://www.msn.com/de-de/news/politik/afd-verbot-an-„dummster-antrag-des-jahres“/story-af123456789))。そもそも、憲法裁判所の裁定が出るまでは3～5年を要すると見られている。
- (訳注 5) 2024 年 8 月 23 日、ノルトライン・ヴェストファーレン州のゾーリンゲン市の 650 年祭の最中に起きた、シリア人青年による、3 名の死者と多くの負傷者を出した襲撃事件。多くの市民に強い不安を与えることになったこの事件は、たんにこうした殺傷事件の経緯と本質のみならず、滞在が拒否された庇護権の申請者の問題、ドイツにおけるイスラム主義そのものの問題、さらには、移民・難民に関する法改正といった、重要な諸問題を社会全体に突き付けることになった。
- (訳注 6) カローラ・ラケーテ (Carola Rackete, 1988～)。自然保護・環境問題の活動家。2024 年 6 月の欧州議会選挙では、左翼党の候補者名簿第二位として推薦されて当選し、欧州議会議員となる。欧州議会選挙では、左翼党は 2.6% の得票に終わり、彼女の立候補に対しても、少なからぬ疑問や批判が出された。
- (訳注 7) ルートヴィヒ・エアハルト (Ludwig Erhard, 1897～1977)。CDU。1949 年から 1963 年まで経済相、1963 年から 1966 年までドイツ連邦首相。ドイツの戦後の経済復興の舵を取った人物とされ、「社会的市場経済」をめぐる論戦においても有名とされる。
- (訳注 8) 「頓馬な牛」と訳した Rindviecher は、Rindvieh (牛) から派生した語で、「頓馬な人」の意。
- (訳注 9) 「愚かな雄牛」と訳した Hornochse は、Horn (角) + Ochse (雄牛) で、やはり「愚かな者」「大馬鹿者」の意。
- (訳注 10) かつて東ドイツ時代に存在した、食料品や日常の生活物資などを販売する店舗で、80 年代には 450 万人の組合員を擁したとされ、各地に点在していた ([Konsumgenossenschaften \(kurz konsum\)DDR Museum \(ddr-museum.de\)](https://www.konsumgenossenschaften.de/kurz-konsum-ddr-museum-ddr-museum.de)、参照)。東ドイツ時代には、小さな郵便局、パン屋、肉屋、花屋、文房具店、化粧品店、おもちゃ屋、そして「コンズム」といった店が散らばっている地域が存在していたのだが、現在はそのほとんどが消え、大手スーパーの全国チェーン店が「君臨」するのみの風景となっている。
- (訳注 11) ”LPG” の略称のもと、東ドイツの農業生産の中核を占めた集団農業組織。「統一」とともに壊滅的な状況となり、1993 年までに農業・林業関連では 5 分の 4 の労働者が失業し、農業では約 75 万の職場が消失して、92 万 3 千から 17 万 9 千へと激減する ([Vor 60 Jahren: Gesetz über die Landwirtschaftlichen Produktionsgenossenschaften in der DDR | Hintergrund aktuell | bpb.de](https://www.bpb.de/aktuell/60-jahren-gesetz-ueber-die-landwirtschaftlichen-produktionsgenossenschaften-in-der-ddr/101234567)、参照)。
- (訳注 12) ロシアの反体制派活動家アレクセイ・ナワリヌイ (1967～2024) が、2020 年 8 月 20 日、シベリアのトムスクからモスクワへ向かう飛行機のなかで、毒物によると見られる体調不良を惹き起こした事件。ナワリヌイは、命を取り留めた後も幾度か収監され、2024 年 2 月、北極圏にある刑務所で死去。ギジは、彼の毒殺未遂にプーチンが関わっている可能性は低

いのではないかとの意見表明をしたものの、当然のことながら、党内ではさまざまな異論が提起されたと伝えられる（[Giftanschlag auf Alexei Nawalny – Wikipedia](#)、参照）。

（訳注 13） ルドルフ・バーロ（Rudolf Bahro、1935～1997）、東ドイツの哲学者、エコロジーの理論家かつ活動家。『オルターナティヴ』は1977年に出版され、彼は国家保安省〔シュタージ〕に逮捕され、SED（社会主義統一党）から除名される。翌1978年、「情報の国家反逆的収集」と「国家機密の漏洩」の罪により、8年の刑が言い渡され、バウツェンの国家保安省の刑務所に収監される。裁判のさいに弁護を担当したのはギジであり、彼による上告も、「根拠なし」として退けられる。翌1979年10月、バーロは「東ドイツ建国30周年」のさいの恩赦（!）として釈放されるが、東ドイツの公民権は剥奪されており、西ドイツに家族とともに移住する。バーロはやがて、西ドイツで緑の党の創立者の一人となる（データは、[LeMO Biografie Rudolf Bahro \(hdg.de\)](#)、参照）。

（訳注 14） ヘルムート・コール（Helmut Kohl、1930～2017）、CDU。1982年から1998年までドイツ連邦首相であり、1989年から1990年にかけての「ドイツ再統一」の時期の首相であった。

（訳注 15） オスカー・ラフォンテーヌ（Oskar Lafontaine、1943～）。BSW（ザーラ・ヴァーゲンクネヒト同盟）。1985年から1998年までザールラント州首相、1990年の連邦議会選挙では、SPDの連邦首相候補であり、「再統一」をめぐるこの時期、CDUのコールと首相の座を争う。1995年から1998年までSPD党首。2005年、SPD左派によるWASG（「労働と社会的公正のための選挙によるオルターナティヴ」）に参加、2005年から2009年まで、ギジとともに連邦議会左翼党会派団長。2007年から2010年まで左翼党共同党首、2022年3月、左翼党を離党、2024年初頭からBSW。

（訳注 16） アンゲラ・メルケル（Angela Merkel、1955～）、CDU。2005年11月から2021年12月まで、4期に及ぶ内閣の連邦首相。2015年は、彼女の第三次内閣の時期に当たる。

（訳注 17） 2016年12月19日の夜、買い物客で混み合うベルリンのクリスマス・マーケットに大型トラックが突っ込み、13名の死者と少なくとも67名の重軽傷者を出す大惨事を惹き起こした。

（てるい ひでき）



新書散策の旅（シリーズ第 17 回）

…「おしゃべりはもうたくさんだ

『無支配の哲学』から学ぶ…

宮崎 昭

野卑というか、下劣というか、はたまた無謀というか、その表現が荒々しいのです。一言でいうと、お下品なのです。

民主主義なんていないんだ。わたしたちは政治家じゃない。支配者に未来をせおわされるのも、みずから未来をせおうのも、どっちにしてもまっぴらごめんだ。主人も奴隷もクソくらえ。いいねも票もどうでもいいね。こいよ、ディスコミュニケーション。チクショウ、チクショウ、チクショウ、チクショウ、チクショウ、チクショウ。アアアアアアアッ、アアアアアアアッ。わたしたちに未来はない。おぎゃあ、おぎゃあ。フオオオ、フオオオオオオ！！子どもにかえったっていい、獣にかえったっていい。過去だけひろって生きていきたい（栗原[2024]34－35 頁）。

しかしです、この「お下品」な筋を追っていくと、“支配されない自由”という夢のような至極のメッセージが見えてくるのです。不快感をできるだけ抑えて我慢して読み通してみると、重大な論点が浮かびあがってくるはずです。また「お下品」の評価も変わってきます。

この新書を取り上げたのは、先日駒澤大学で開催された「第 24 回市民科学研究会」で私が発表した「銃器の世界的使用価値」に起因しています。報告の主眼は、アメリカが自由な「銃社会」にあることへの疑問に始まって、かくも世界中に銃器や兵器がはびこっており、これを許している世界のあり様に大きな疑問と憤りを感じたからです。もちろん、そのアメリカで銃の所有や使用を規制する声は少なからずありますが、功を奏してはいません。銃器は人を幸せにはしません。銃器は社会を平和に導くことはしません。そう考えての報告でした。

ところが、栗原さんは私の耳元で叫ぶかのごとく主張するのです。「普仏戦争を見ろ、武器無くして闘うことができるものか」。「武器だ！」「武器だ！」。1870 年 7 月 19 日に始まるこの戦争、プロイセン軍精鋭部隊 50 万人に対してフランス軍の実働部隊 25 万人、勝つ見込みのない戦闘で、ナポレオン三世も出撃するのですが、状況は悪化するばかりです。

国境をこえてプロイセン軍が侵攻してきた。パリにも続々と敗戦のしらせがとどいてくる。これはもう皇帝にも、正規軍にもたよっちゃいけない。自分たちの身は自分たちでまもろう。武器だ、それにはまず武器がなきゃいけない。ここで、あのブランキがうごきだす。8 月 14 日、ラ・ヴィレット街事件だ。午後 3 時、白昼堂々、ブランキは 100 人ほどの仲間をひきつれて、ラ・ヴィレット大通りにある消防署にむかった。不意をついて大人数で消防署をかこいこみ、交渉して、もっている武器弾薬をあげわたしてもらおうとおもったのだ（栗原[2024]173－174 頁）。

結局は武器弾薬の略取に失敗し、ブランキは逮捕されるのですが、ここで注目したいのは、正規軍が敗走してしまい「自分たちの身は自分たちでまもろう」と決意するところです。武器をもたない市民が自発的に銃器を携えて立ち上がるわけです。こうした「自警団」の結成は「国民衛兵」と呼ばれ、誰でもが武装することができる根拠となったのです。銃器を地球上から消去したい私にとって、これは大問題です。

ところで、宮崎[2024]で紹介したように、アメリカが自由な「銃社会」として存在しつづけられるのは、合衆国憲法修正第二条の存在でした。解釈は様々ではないのですが、

「規律ある民兵（Militia）は、自由な国家の安全にとって必要であるから、人民が武器を保有しまた携帯する権利は、これを侵してはならない」、とあります。民兵、義勇軍、市民軍、自警団、国民衛兵、パルチザンなど多様に呼ばれている、その民兵です。

この銃所持自由の根拠となるのが「主権者」という重い位置づけです。宮崎[2024a]で紹介したように「主権者たる市民には、代理人である政府に抵抗する権利が保障されている。修正第一条の言論の自由は、政府を批判する権利である。信仰の自由は政府に信仰を強要されないことを保障している。また結社や請願の権利は政府に抵抗する手段を保障している。したがって修正第二条は、単なる自衛手段であるだけでなく、政府と戦うための最後の手段になるかもしれないことを意味している」（鶴浦 裕さん）という重要な論点が示されていました。

また中野博文さんも、フォローするかのよう、

国家の基礎が人民にあるという政治観は、…（中略—宮崎）…17 世紀イギリスのピューリタン革命で生まれ、北米植民地社会にも定着した。

ただ、植民地人たちは「人民」についての理解が独自の経験に基づいて、イギリスとは異なるかたちに変貌させた。支配層に暴力で反抗する政治文化を発展させたのである（宮崎[2024b]）、と述べているのです。

なるほどと頷くばかりなのですが、権力や支配層に武装した暴力によって反抗する場合、それは軍事クーデターとか反革命と呼ばれる事態といかように異なるのか、無条件に武装した暴力を認めてよいのかどうか、大きな疑問を残すことになります。そこで持ち出されるのが、“正義”であったり“民主主義”であったりするのですが、これがまた厄介なハードルとなります。「相反する正義」が大手を振るっているからです。

栗原さんが大きく紹介し、深く賛同しているのが「マフノ」の死を賭した革命的行動です。暴力はもちろん、武器をもつことも積極的に肯定するマフノです。

マノフの存在、私、知りませんでした。栗原さんによると、1889 年ウクライナで生まれたアナーキストで、今日なお国民的英雄として名を残しているようです。そのマフノが活躍したのは、1917 年ロシア革命前後です。アナーキストですから、ロシア共産党（ボリシェヴィキ）だけでなく近隣の保守政権とも対立します。

ちなみに、マフノ軍の鉄則はただひとつ。農民の敵をせん滅することだ。これは誇張していつているんじゃない、マジでみな殺しだ。マフノはグリャイボーレ近辺にかぎらず、もう東西南北、ウクライナ全土に馬をはしらせ、地主のブラックリストみたいのをつくっていつて、こいつはひでえやつだ、主人ぶってんぞってのがいたら、その屋敷を襲撃。みな殺しにして、風のようにさっていつた。はやいのだ。ひとつの村をおそったら、翌日は1キロはなれた村をやっていつて、気づけばもう何十キロもさきにゆくえをくらましている。しかもとちゅうで、村人をこまらせていつ

る守備兵やドイツ軍がいるってきいたら、すかさずそこにおもむいて、やっぱりみな殺しにしてさっていく（266 頁）。

一読して、あたかも野盗集団のごとくあり、にわかに賛同しがたい気持ちになります。そうでした、栗原さんの「お下品」で「粗野」な言い回しは、アルシノフ[2003]において事実在即して客観的に描かれたマノフの「行状」を、思い切ってデフォルメし、まるで韻文を心がけているかのようです。いわば、読む者に臨場感を与えようとしたのかもしれませんが。栗原さんをそのように導いた根底には、“支配からの自由”という哲学があるからでした。武装して相手を殺してまで実現しようとしているのが、いかなる支配からも自由でありたいとする行動原理です。

まずは議会制民主主義を一撃します。

だいたい選挙がどうこういうひとは、議会政治が民主主義だとかいってくる。でも、まず議会政治を確認しておきたいのは、この時点でウソっぱちだということだ。…（中略—宮崎）…政治形態といわれるものは、おおきくって三つにわけられる。

…（中略—宮崎）…

（一）一者による統治…君主制

（二）少数による統治…貴族制

（三）多数による統治…民主制

じゃあ、これに議会政治をあてはめてみたら、どうなるだろうか（栗原[2024]29－30 頁）。

こうして、栗原さんは、一億 2 千万人に対して 700 人程度の議員が統治するのは「ようするに、議会政治とは少数による統治」であり「議会政治とは、貴族制にほかならない」（31 頁）と断罪します。加えて、ホッブスの社会契約論についても容赦しません。

ホッブスは、人間の原始状態から話をはじめて、その本能みたいなものを自己保存といっているわけだが、ひとつで自分の利益のためだけにうごくものなのだろうか。たとえば、わたしが研究しているアナキズムの思想では、生きとし生きるものには、「相互扶助」の本能がそなわっているといわれている（39 頁）。

クロボトキンの「相互扶助論」は人間以外の動物からまず論じられていました。人間の「原始状態」が闘争の渦中にあると考え、それを永遠の自然の「本能」と考えるのではなく、**いわば時代の歴史的な文脈（資本主義的な競争）のなかで解釈された「常識」と言えるかもしれません。栗原さんは、ただ人間が支配されることを拒否し、なんであれ支配からの自由を大前提、至極の前提におきます。自由こそがイノチなのです。人間と人間の関係が、支配・被支配ではなく対等で自由な関係にあることに求めているのです。**

君主に支配されるのはイヤだ。もっとよくなれ、資本主義。でも資本家に支配されるのもイヤだ。もっとよくなれ、社会主義。でも、社会に支配されるのもイヤだ。

もっとよくなれ、人間主義。でも、人間的なものに支配されるのもイヤだ。もっとよくなれ、もっとよくなれ。自由をもとめればもとめるほど、より生きずらくて、^{こうかつ}狡猾な支配体制ができあがってしまう（108 頁）。

そう考えるからこそ、現代のリベラリズム礼賛の風潮にも厳しい目がむけられます。自由と支配の問題は、遠い過去の問題ではなく、また近未来の課題でもなく、いま、この生活のなかでの「生き方」の課題として設計されています。

さいきんリベラル、リベラルと、右傾化にたいしてなんでもリベラルであることがいいことのようにいわれているが、ほんとうのところ、リベラリズムの自由というのは、財産をたくわえるのっていいよね、もっともっとふやしていきましょう、どっちがすごいか競争しましょうということではない。…（中略—宮崎）…ように、自分が自由にあつかうことのできるヒトやモノをふやしていきましょうということだ」（同上 84 頁）。

平等に開かれた学力競争、その先にある受験戦争、さらには男女差別も引きずりながらの出世競争、はたしてそこに身を置くことは自由な生き方なのか、と問うています。結局は自分の利益を第一に、他者の利益には関心を寄せない生き方に疑問を投げかけています。否、怒りをぶつけています。

さて、民主主義も統治の手段であり、自由を奪うものであるという理解に、少し猶予をもらいたいと思います。武器をもち、暴力で自由を勝ち取るという論旨についてです。

そんな生き方、社会の仕組みを「ぶっ壊せ！」と言っているのが栗原さんです。

ユーゴスラヴィアの話は極めて教訓的です。武器によって平和をもたらすことはできないという山崎[2023]は、武装闘争の功罪、両義性について次のように述べています。

…さらに第二次大戦において、共産党が主導し多くの農民を組織したゲリラ戦部隊であるパルチザンが、ほぼ独力で枢軸国からの解放を達成した成功体験をもとに、「全人民防衛体制」と称する、有事の際に一般市民の武装抵抗を制度化する体制をとり、各地に武器庫も整備された。…（中略—宮崎）…こうした武器は、相互の内戦で用いられることとなった。この内戦は多数の犠牲者を生み出したのみならず、現在にまで続く深刻な相互不信と対立を当事者の間にもたらした（66 頁）。

クロアチア、セルビア、ボスニアなどに、それぞれ「マフノ」が跋扈していたと考えてよいのだろうか。

（みやざき あきら）

【参考文献】

- 栗原 康[2024]『無支配の哲学 権力の脱構成』角川新書
柴田直治[2024]『ルポフィリピンの民主主義—ピープルパワー革命からの 40 年』岩波新書
アルシノフ、ピョートル. 郡山堂前訳[2003]『マフノ運動史 1918—1921 ウクライナの反乱・革命の死と希望』社会評論社
文京洙[2020]『文在寅時代の韓国—「吊い」の民主主義』岩波新書
宮崎 昭[2024a]「アメリカ『銃社会』のなぜ <武器よさらば：銃器・兵器の「使用価値（有用性）」を考える（1）>『市民科学通信』第 48（5 月）号
宮崎 昭[2024 b]「自由なピストル <武器よさらば：銃器・兵器の「使用価値（有用性）」を考える（4）>『市民科学通信』第 51（8 月）号
山崎信一[2023]「ユーゴスラヴィア紛争からの教訓」南塚信伍、他[2023]『軍事力で平和は守れるのか 歴史から考える』岩波書店

反面教師

塩小路橋宅三

反面教師とは正面教師に対する語句である。悪いところを見て、悪い見本としてこうなってはいけなと論ずることであろう。自衛隊桂駐屯地の南西角に砲身もそのままの戦車が置いてある。夜になると薄暗い照明を照らしていたので、展示のための道路際への配置であることは確実である。道を歩いていた小学生らしい男の子が「すげえ、カッコいい！」なんて言っていた。人を殺す道具が間近に見えることには抵抗を感じたが、これは本物であることも確実である。つまり、おもちゃの戦車ではなく実戦用の殺人道具である。自衛隊関係者に言わせると、このような兵器を使わなくてもよいためにはある道具であるとも言っているのであろうか。かなり善意な解釈であるが、間違ってもこの道具を駆使して人殺しをしようとは言わないであろう。むしろ殺されるのは戦車の乗員であって、歩兵の発射する対戦車ミサイルジャベリンには太刀打ちできないであろう。乗員の命とともに税金の数十億円が消えていくこととなる。そうなると、市民を見捨てて退却するのみであって、決して市民を守る兵器ではない。その意味から反面教師であるが、本当のハイテク兵器は目に触れることはない。

飯山陽の近著「卑怯者！」(WAC)が面白い。彼女は本年四月に百田尚樹に担がれて衆議院選東京15区補選に立候補したイスラム思想研究家である。この選挙が注目されたのは「つばさの党」による選挙妨害事件であった。彼女は「イスラエルの犬、アメリカの犬」と大音響マイクで罵られたということである。面白いところは小池百合子を反面教師として善戦したようである。同時に左翼系の研究者や政治家を「あっち系の懲りない面々」として辛辣な批判が加えられている。私自身も彼女の言うあっち系であることは間違いないが、左翼の教条主義を反面教師としているので、彼女の言う左翼の限界も感じている。

戦前の隣組町内会は国家にとって危険と称された左翼思想の監視も兼ねていた。「非国民」とか「アカ」と呼ばれるラベリングによって危険人物を炙り出したのは、町内会を形成していた庶民であったと言われている。お上に反対する者は国賊として戦争に突入していったのである。日本を占領したGHQはこれを見逃さずに町内会の解散を徹底した。その代替として行政から一線を隔てた市民によるレーマンコントロールの公安委員会や教育委員会、社会福祉協議会やPTAなる組織を創設した。その単位となるのは自治体や地域団体であったが、前者の二つは国家警察や文科省の下部機関のようになって、設立当初の理念から変質している。町内会は自治会として復活していくが、そのようになってからも国家の軍国主義に恭順であった戦前の町内会を反面教師とした自治会であったはずである。当初は地域ボスに対抗した進歩的文化人が自治会活動を担っていたようなこともあった。特に団地化した地域ではそのような傾向が強く、まさに革新的にリードしていったと考えられる。ところが、そのような左翼思想は特定政党の考えと同期することによって分裂を招くことになる。しかもその進歩的文化人は団地化した地域に土着することなく、より住環境の良い地域に移っていったのである。ここで問題なのは地域

での福祉機能や教育機能はいち早く自治会とは別の社会福祉協議会やPTAに移されたために、そこに大衆運動とは別の保守的な考えが持ち込まれたことである。そしてそのことが変質を招くこととなり、結果的に社会福祉協議会は第二福祉部局化し、PTAは学校の管理するところの保護者会化することになる。国家や行政が市民組織に介入してくるには巧妙にアメとムチが駆使されるが、主権は市民に存在するとのポーズのもとで、左翼の分離と排除が地域で進行していったように思える。それは政治的行為の排除と言いつつ自治会の革新性の保守化であって、戦前の町内会を反面教師として活かされていない。つまり、予算を握っているお上に逆らえないのである。

行政に従順にワクチン接種やマイナカードの普及を回覧板機能で協力している。マイナカードの中でのマイナ保険証に注目するのは、皆保険制度によって日本に住む外国籍の住民も含めて国民全員の受診情報の把握によって、各人の健康状態を知ることが可能となるからである。もちろん、関係者が健康保険証番号を入力すれば現行でも可能なかもしれないが、それならば無理をして強制的にマイナカードに紐づけする必要性が認められない。しかもその状況が反映できるまでに一ヶ月間ほどの時間がかかるために、決して緊急的な情報としては役に立つわけではない。また、そのようなことを決定できるのは厚労省のはずなのであるが、なぜか河野太郎前デジタル大臣が現行の健康保険証の廃止によるマイナカード紐づけを発表する記者会見を行っていることが奇異である。ちなみに総務省の所轄である運転免許証は今のところ紐づけは任意の方針である。日本の誇る健康保険に関する情報はどこの国の製薬会社や保険会社も知りたい情報である。日本は国民皆保険制度によって、その情報の精度は世界一と言える。そこで戦前の国体に該当しつつ国家管理を強めているのがマイナ保険証で、仮に徴兵検査などに援用されたら大変である。特に厚労省の公務員は国民総背番号制度となるマイナンバーカードに面従腹背でいてほしい。

自衛隊の軍隊化が是認されそうな状況だし、教育や福祉のビジネス化という形での国家がアメ的に介入するようなことは危険な兆候である。これは左翼も右翼もないところ、つまりこっち側とあっち側を超えた論議が必要なのである。事業によって助成金の対象とするとか、経済的徴兵のように奨学金で大学に行くことができるとかのアメ的政策には必ずムチがあると、うがった見方が必要である。ここで戦前の国家統制を反面教師として考えなくてはならないし、私たちはデジタル化と銘打った国家による戦前化には抵抗しなければならない。便利になるとは一種の麻薬でもある。たとえば夢洲での万国博に続くIRが話題となっているが、将来的にこれを大阪の観光資源の目玉にするつもりらしい。そこで反面教師としてのギャンブル依存症がクローズアップされてくるのであるが、カジノでのテラ銭をギャンブル依存症対策に充てるという論理ならば、その元凶となるカジノをやらなければ良いとの展開になる。カジノ推進派の人たちからすれば、人生すべてギャンブルであるとでも言いたいのであろうか。経済活性化で世の中が良くなるような幻想のアメ的政策をちらつかせる本質は政策的詐欺である。

(しおこうじばし たくぞう)

《 随想 1 》 ネットワークとフェイク

青水 司

「フェイク」は単なる嘘ではなく、とりわけもっともらしい見せかけ、あるいはねつ造だからとても嫌悪を覚えます。スポーツのフェイントや音楽の ad-lib もフェイクだそうです、これらはもちろん優れた技です（国語辞典より）。後ほど書きたいと思いますが、コンピュータやネットワークはフェイクに適しています。また原子力産業はあってはならない産業なのでねつ造の塊のように「安全神話」というフェイクをばらまきます。

さて、フェイクは情報化とくにネットワークと共に展開してきたと思います。そのことを手掛かりに、コンピュータとネットワークの役割も考えてみたいと思います。わたしは専門を技術論（技術労働論）ということにしていますが、30 年くらいほとんど勉強していません。一応理由はありますが、一時期「IT 革命」論が流行った 1990 年代、IT 労働の分析を少し手掛けたことがあります。そのころから考えていた問題に「情報にはだまされやすいということ」と「ソフトウェア技術者の厳しさ」があります。テレビで NHK の「ドキュメント 72 時間」などの番組のインタビューで退職者（転職者）にソフトウェア技術者がよく出てくるのは関連があるのではないのでしょうか。

富士通の技術者だった頃、わたしはハードウェア（現在の洗濯機大のライン・プリンター）の開発をしていましたが、DA（Design Automation）あるいは CAD（Computer-aided Design）という自動設計の開発のまねごとを任されていました。構造設計の手伝いをするソフトウェアの設計です。主な仕事であるハードウェア設計（現在ではこれさえ自動化されています）のうち標準化可能な歯車などの機構部品を自動的に設計するという合理化ですが、歯車の直径などの数字を入力するだけで構造部品を設計するため、当時は大学の卒業論文作成などに使っていた FORTRAN（科学技術用プログラム言語）などを使う必要がありました。現在も銀行や、鉄道をはじめとするシステム設計にはわたしたちが使う日常言語は使えませんから、基本のところでは CPU（Central Processing Unit＝中央処理装置）が処理できる機械語（最終的には 1 と 0 の組み合わせ）によるデジタル設計をします。つまりアナログ（長さ、質量や時間などの物理量を示す cm、g、秒などの日常言語）の世界とは違ってデジタル（機械語）の世界では頭脳の特定部分つまり 0 と 1 に還元された記号のみを扱いソフトウェア技術者を消耗させるのだと思います。換言すれば、アナログの波（音波）のようになめらかに変化し、アナログ時計では 0 分 59 秒から 1 分になりますがデジタル時計では突然 0 分から 1 分に変化するわけです。アナログの音波をデジタル化すると、確かに 0 か 1 以外の波の歪みやノイズ（雑音）を無視し合理化できます。逆に言うと自然・人間らしい本来の雑音が入った生活音などがなくなりますというより無視します。つまり機械的な音のみの世界になってしまうわけです。そういう意味では客観化ともいえます。最近ニュースの伝達まで AI で実験放送していますがとても違和感があります。合理化のために何故このようなことまでするのでしょう。そのために、上述のソフトウェ

ア技術者が機械語のなかで精神疾患などの職業病になっていることは大いにありうると思います。1980年代からパソコンが開発されインターネットの普及と相まってとくに問題になってきましたが、総合的なシステム設計はかなりアナログの世界で行われていると思いますが、多くのプログラム作成や部分的システム設計はほとんどデジタル中心の世界だと思います。労働条件の改善を政府や資本家に強く要求する必要があります。少なくとも総合的な調査をすべきです。

河野太郎元デジタル大臣は、マイナカード導入の混乱時に、あれは入力時の人間の問題であってシステムが問題ではありません、と言ったそうです。もしそう思っていたら「バカ」だし、そうでなければまさに「フェイク」です。前者ならシステムと入力する人間の関係が分かっているのです。つまり、システム設計は入力する人間に対応して設計しなければなりません。たとえば素人であれば間違えないような親切な設計（マンーマシン・インターフェース）が必要です。駅の券売機は駅員減らしの合理化ですが、その分購入者が「大阪まで1枚下さい」と言う代わりに「労働」を増やさなければなりません。親切な設計をすれば私でも簡単に切符を買えます。しかしシステムが悪いとさらに「労働」が増えたり、駅員を呼ばねばなりません。みなさんは合理化は誰のための合理化かご存じと思いますが、資本主義では基本的に逆立ちしています。このようにシステムと人間は密接に関係しています。

また、上に述べたように、神経をすり減らすシステム設計やプログラミングではよく間違いがあります（ハードでももちろんありますが）。だからバグ取り（プログラムの間違いの修正専門の仕事）さえあります。しかも、誰でもできるのではなくプログラミングで間違える場所などをよく知っていないと出来ない仕事で重要です。銀行のシステムが時々システムダウンします。「システム（技術）が問題ではありません」というのは「人間が問題ではありません」と言うのと同じで、「フェイク」そのものです。しかも、その間違いが故障に繋がるのが百万回に1回しかないという場合がありますシステムダウンが起こりえます。システムはハードもソフトも人間が創っているのです。SE経験のあるわたしの友人は電気代など公共料金を自動振り込みにせず、毎月徴収にこさせているそうです。

最近、税金や保険料の長年の過少徴収で、追加徴収され住民が困っていると聞きましたが、人間が時々介在していればほとんど早期に分かることで、人減らしがもたらした問題の一つだと思います。このように合理化ばかり考え、兵庫県の斎藤知事が「改革」を自画自賛し、県民に評価されているのも、大阪府・市も基本的に同じで、議員減らし、公務員減らしで碌なことはありません。大阪でも兵庫でも相変わらず公務員減らしが「改革」だと思わされている住民がかなりいるようですが、結局住民サービス（この言葉自体問題ですが）の合理化、人間軽視、無視が進んでいるのに、公務員いじめ（今回のように死に至ることさえある）をいつまで許すのでしょうか。資本主義的に合理化（機械化）すれば公務員（労働者）が楽になるはずはありません。これこそフェイクです。

付記：ビラ風レポート「原発 そこが問題だ」は別にして、この随想が何回続くか、これまでのように1回あるいは数回で終わるかもしれませんが、これまでの轍を踏まないように作戦を考えています。間違いは承知で、現実主義・経験主義で書きます。

（あおみ つかさ）

国連と U. S. A.

竹内 真澄

NY 国連ビルの地下にギフトショップがある。そこで買い物をした。すると、8 %（当時）の消費税がかかった。

僕は不審に思い、「なぜ国連がアメリカ政府に税金を払わねばならないのか」と尋ねた。この背景には、アメリカ政府が国連に払う尊敬が足りないという、ぼくのかねてよりの疑いがあった。

ショップの女性職員は「国連といえどもここではひとつの私企業なのよ」と言った。これは社会科学的に見て素晴らしい説明だ。

国連は私企業なのか！？とぼくは頭が混乱した。私企業は必ずしも国連ではないが、国連はかならず私企業なのである。ユニセフやユネスコの土産物を買っても、アメリカはピンハネする。しかし、国連はアメリカをピンハネできない。

ぼくは「That's funny」と言ったら、別の職員が会話にはいってきて小声で言った、「Nobody likes U. S. A..」そこで、ぼくはふたりと握手してから「You are my friends.」と言葉を交わして別れた。研究室の掃除中に出てきたメモ書き（執筆はおそらく 2000 年）による。

（たけうち ますみ）

漱石と大逆事件

竹内 真澄

本誌9月号に載った、拙著『坊っちゃんの世界史像』にたいする重本さんのコメントは、独学でやってきた筆者の漱石研究のいくつかの弱い点に触れるものである。それで、よい機会だから、この点を掘り下げてみたい。ただ、研究史をみると、なかなか容易には決着がつかぬと思われるものもあり、本稿はできるだけ竹を割ったように割り切れるものではないことをおことわりし、悩ましいところは悩ましいままに書いてみたい。

第一に漱石の「自己」とはいったい、どういうものかである。自己とは国民であり、背後に国家があると重本さんは言うが、事実ではない。もし、世間でいわれるように漱石が「国民的作家」ならば、ぼくはあまり漱石を研究したいとは思わないのだ。寺田寅彦への手紙1901や「私の個人主義」1914に書かれているように、漱石は明治の進歩的知識人のなかではもっとも国家に囚われないほうだ。一民間人として、帝大と縁を切っているばかりか、始終国家国家と騒ぐような人々と群れることはしない。国家が窮地に陥ったらさすがに国家のことを真剣に考えるとしても、そこでいう国家は政府機関のことではなく、国民のことであって、通常は国民という枠には収まらずに、できるだけコスモポリタン（世界市民主義）でやっていこうという主義であった。しかも、この「自己 self」は「利己 ego」と区別されていて、「利己本位」でもなく「利他本位」でもない。また人の真似をすることでもない。自己本位というのは第12章「漱石における賃労働の問題」で書いたように、やりたいこととやっていることが合致することである。したがってまた、がんらい資本主義と相容れない。資本主義は、上の者が下の者へ命令して社長のやらせたいことを手伝わせることである。ゆえに下の者は、このシステムの下では自分で自分の活動を処分することが許されない。だから、自己本位ではない。

そもそも賃労働を導入したのは明治国家なのだから、当の国家に重きを置かぬことは、賃労働を廃棄することと論理的に整合する。第1章と12章を突き合わせて、読んでほしかった、というのはぼくの欲張りすぎであろうか。

第二に伊豆利彦氏からの引用であるが、漱石が「大逆事件になにひとつふれていない」というのは、どういう根拠によるのか、ぼくにはわからない。1979年の指摘であるが、もう45年経っている。その間に伊豆氏の見解は克服された。たとえば、中村文雄『漱石と子規 漱石と修 大逆事件をめぐる』和泉書院、2002年や塚本章子「馬場孤蝶と与謝野晶寛、大正4年衆議院議員選挙立候補―大逆事件への文壇の抵抗―」『近代文学試論』48号、2010年をみると、大逆事件後の漱石周辺の大逆事件への批判が詳細に研究されている。

中村氏の研究によれば、幸徳秋水が逮捕されたのが1910年6月3日、死刑判決が下ったのは翌年1月18日である。処刑は1月24日であった。このとき、漱石は1910年6月6, 9, 13, 16日と長与胃腸病院に行き、胃潰瘍で6月18日に入院し、7月31日に退院した。一方7月27日に第二次桂太郎内閣平田東助内相は「社会主義に対する愚見」を提出し、関連出版の監視と除去を進言した。

中村文雄氏は、漱石はこの経過を伝聞で知っていたらと推測する。だが、ものを書く余裕はない。8月6日に漱石は修善寺温泉菊屋旅館に着き、17日大吐血となる。その後、長与病院に再入院し、10月11日から1911年2月26日まで病院生活を送って、退院した。そのとき、すでに秋水の処刑は終わっていたのである。漱石の反応が、情報収集に傾き、発信が弱いことは中

村氏も認める。

しかし、大逆事件そのものへの言及がないからと言って、幸徳秋水をどう考えていたかという点と国家による思想統制に反対する点で、漱石は非常にはっきりしていた。

『それから』1909で、主人公代助の友人平岡は幸徳秋水にかんして、政府がいかにこの社会主義者を恐れているか語るシーンがある（新潮文庫、241頁）。新宿警察署は秋水の監視と尾行のために月100円予算を使っているということまで書いている。むろん、国家が思想の自由の邪魔をすることは許されない。あるいは、それに血税を使うのは滑稽である。そういう視点からすれば、たとえ社会主義に賛同せぬ人でも、幸徳秋水は擁護すべき言論人なのだと平岡はにおわせているのだ。

さらに、大逆事件の審理と同時並行で漱石がやったことも、見逃せない。1910年文学博士号辞退、同年の「文芸委員会は何をするか」における国家の文学への干渉の批判などだ。

中村文雄氏は「現代日本の開化」1911、「私の個人主義」1914のいずれも大逆事件後の国家主義への抵抗の跡があると言う。いちいち証拠をあげることはしないが、そうだろうとぼくも思う。

最後に塚本章子氏は、先の論文2010で、1915年の衆議院選挙に東京で立候補した馬場孤蝶（与謝野寛は大阪で立候補した）を応援するために文学者グループは「大逆事件への文壇の抵抗」をなしとげたとする。とくに孤蝶のために漱石は「私の個人主義」を『立候補後援現代文集』1915年に無償でつかってもらっていいと提供した。

孤蝶の政策は①軍縮、②参政権の拡大、③言論の自由、④治安警察法の撤廃、⑤新聞紙条例の撤廃などであった。孤蝶は兄の馬場辰猪の影響もあって、次第に社会主義へ傾斜を強めていた。むろん、漱石は1902年ごろから社会主義に敬意をいただいていたから、孤蝶の応援に何の差しさわりもなかった。これは、大逆事件にたいする漱石を含む文壇の真正面からの政治活動である。

このように見てくると、漱石はたしかに大逆事件そのものにたいする論評は書いていない。しかし、前後の作品と選挙運動で、十分に大逆事件への批判をしたばかりか、国家主義全般にたいして鉄槌をくだしたと言えないであろうか。漱石は怒っているのだ。もしそうであるならば、徳富蘆花が偉くて、漱石は同じではないということは、必ずしも当たっていない。蘆花は蘆花である。その周りには桐生悠々、石川啄木、木下杢太郎、内田魯庵、森田草平らがおり、大逆事件に強い関心を持っていた。彼らは漱石入院中に長尾病院へ見舞いに行き、当の漱石を含めて、蘆花の作ったフロントと地続きの後衛として蘆花を支えたかもしれぬ。特段漱石だけをここから外す理由はないと思うのだが、いかがであろうか。

第三に、天皇の評価である。天皇大権を批判する座標軸が漱石にはないと重本さんはいう。しかし、これにも根拠がない。1912年（M45）6月10日、天皇が能をみる行啓能が靖国神社能楽堂で催された。この時、天皇夫妻、皇太子が列席した。明治天皇はこの年の7月30日に死んだ。だから、大衆の中に交わった最後の行事だった。漱石はこのときに能を見に行った。事件を経過したときの漱石の天皇および皇室への見方はとてもきびしい。取り巻きの乃木希典や山縣有朋、松方正義らを名指しして、皇后陛下、皇太子が休憩時間に煙草を吸ったことをとりあげ、大衆はみな禁煙の中、臣下が火をつけてやったことを「見苦しきことなり」と批判し、最後に「皇室は神の集合にあらず」と言い切っている（漱石全集②0393-395頁。詳しくは拙著『論吉の愉快と漱石の憂鬱』204-206頁を参照）。

これは、ノートに残されただけで、出版はされなかった。しかし、よく考えなくても、明治憲法第3条「天皇は神聖にして犯すべからず」を完全否定している。明治維新以来の小学校教科書はすべて皇国史観で書かれており、天皇は天照大神の子孫であり、神武天皇以下の系譜をうけついで天下を統治したのではなかったか。そのなかで、漱石は、天皇は神ではないと書いたのだ。このことは、全集に一目瞭然のごとく書かれているが、漱石研究ではほとんど誰も触れない。

『こころ』1914を読んで、先生が明治の終焉とともに自殺する結論に納得しない人は多い。少なからざる人は、先生と漱石を同一視して、漱石は明治天皇の後を追って死にたいと思ったか

もしれないと邪推する。漱石もただの明治のおっさんだと。だが、そうではない。かの作品は、先生と漱石が違ふ人であること、否、むしろ対決すべき人物であることを書いた作品である。先生の卑怯は日本帝国主義の卑怯の象徴だと漱石は言いたかった、だから作中にて殺したのである。

なお、法律上の動きであるが、大逆事件の前々年（1908年）10月に刑法第73条が施行された。「天皇、大皇太后、皇太后、皇后、皇太子又は皇太孫に対し危害を加えまたは加えんとする者は死刑に処す」とされた。それが適用されたから大逆事件が成り立った。あるいは、因果はぎゃくで、幸徳秋水らを逮捕するために刑法をつくっておいて、「危害を加えんとする者」にしたのかもしれない。

今回はここまでとする。次回は、『満韓ところどころ』1909の立場と安重根と漱石の比較が求められる。すこしだけ、伏線を張っておくと、重本さんは徳富蘆花の勇気と安重根の決然たる思想性を買っている。それを漱石の、重本さんにはまるで昼行燈のように見える懐の深さにするどく対置している。そして、前者にあるものが後者にはないと断言する。小気味よい。けれども、漱石には漱石の土俵があり、真正面からぶつかるときもあれば、相手の力を利用して敵を転ばす時もある。正面からぶつからないからと言って、必ずしも臆病であったとか、思想に欠けるといふわけではない。要は敵と闘い、敵の力を削げばよいのである。

（たけうち ますみ）



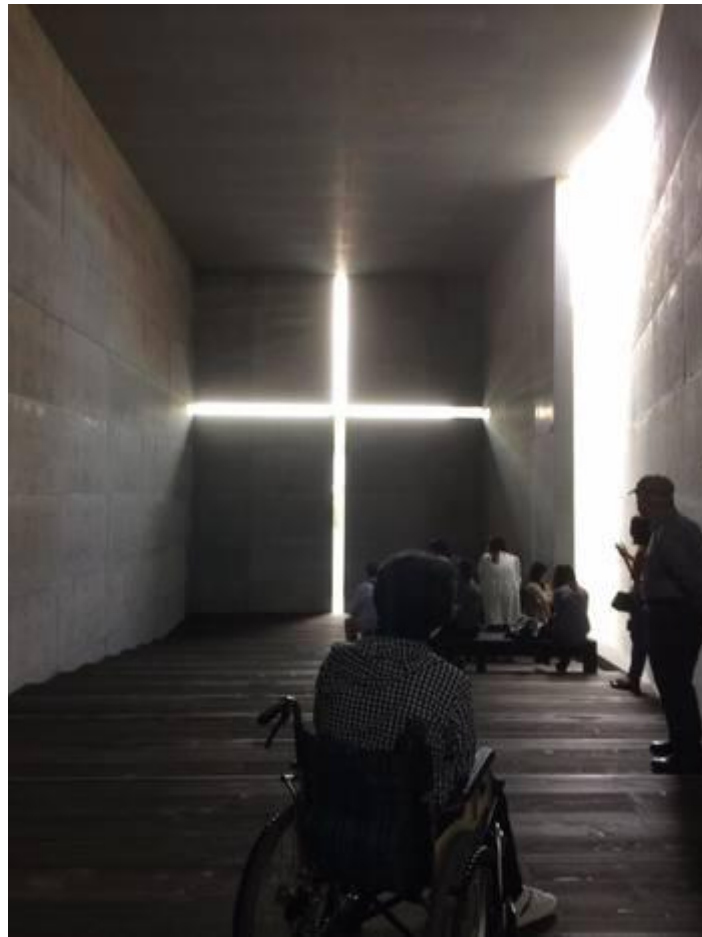
＜グラフィティ・エッセイ＝元上司への手紙＞

バイタリティ競う二人の現代建築家

—安藤忠雄と隈研吾を考える— 序論

眞島正臣

1, 話題の建築を世に問うエネルギーに驚く、安藤と隈の挑戦



＜安藤忠雄のシャープで切れ味のある建築表象＞

前略 S 藤様ご無沙汰しております。かつて不動産広告の制作と販売実施の仕事場で、当時、活躍中の精鋭建築家の先進性を話合いました。同年代の方々がお元気で新たな仕事に取り組まれているのを報道などで知り、拍手を送っている次第です。S 藤様は、部下の私が当時、安藤忠雄に関心があることをよくご存じでした。大阪の街の出来事だった建築賞を受賞された若き建築家、受賞作品の「住吉の長屋」は、デザイン会社勤務時

代のカメラマンA君のお兄さんの住居でした。大阪の都会の狭い敷地という制約を考慮した上での独自建築プランを成功させたことで注目されました。

今や安藤忠雄の活躍は、日本全国に広がり、海外でも話題の仕事をこなしています。安藤忠雄建築の魅力とは、躍進を遂げたそのジャンプ力はなぜ？

<http://www.hetgallery.com/church-of-the-light.html>



<初期の代表作・住吉の長屋> http://www.hetgallery.com/row-house_sumiyoshi.html

「住吉の長屋」の最上階に屋根のない空間があり、庭園のようなものとして設計されたところも審査員が評価したようです。今だに話題になるのですが自分の自宅なのに最上階のAの部屋からBの部屋へ移動するのに雨の日は、傘を使わないといけない。賛否両論あり、面白がられるから注目を浴びるのでしょう。コンクリートという建材は、当時から、合理的だが-賛否両論、欠点も指摘されました。

職場では、マンション新規販売の広告及びマーケティング戦略の仕事で、幾つものプロジェクトを同時に、進行させておりました。忙しい日々でした。

安藤忠雄さんのように全くオリジナルな個の建物を世に出される仕事とは違い、大量生産、大量販売の住宅の販売の手助けに明け暮れておりました。

S藤様は、ときどき自宅の設計図を見せておられました。仁川の新築に招待されたときは、斬新な建物の実現に驚かされました。長年の付き合いの後に、住みこなされた住居も拝見することになりましたが味わいが出てきました。

H不動産から山の一部を残した敷地を購入されたので、桜の木が残されて、花見の頃に、何度か招待をうけました。定年後、得意の油絵で県展に入賞され、その画家仲間と一緒に桜の下で、ご馳走になりました。住宅の住みこなし方、楽しみ方を十分、教えてもらいました。懐かしい思い出です。

安藤忠雄の建築にもどります。初期の「近つ飛鳥博物館」を建築と展示の企画ともども興味があり出かけたが、コンクリートの四角い箱型のこだわりから抜け出せなかったのか、こなれて居ない感じを受けました。変化を感じさせるための手法なのか、下段の「兵庫こども図書館」の室内にも階段は取り入れられております。「近つ飛鳥博物館」

の野外の階段は、庭園のように観客は仲間と座り込み、野外庭園のように楽しんでおり
ました。広場の代替の役割です。

<「近つ飛鳥博物館」>



<https://search.yahoo.co.jp/search?p=>

コンクリートの感触を十分に生かした建築といえるものは、瀬戸内海の直島という前衛美術の拠点としてのロケーションを得て、自由に才能を発揮したと言えるのではないのでしょうか。地下に美術館を建設したことなどは、新しい試みと感じました。コンクリートの地下室独特の無機質感に圧迫感を感じる人には、拒絶されるかもしれません。



<「直島地中美術館」> <https://setouchi-artfest.jp/artworks/>

安藤忠雄の地中美術館は、光がテーマということで、地下の美術館に差し込む光の変化を美術鑑賞と共に感じて歩いた記憶があります。

瀬戸内海の直島は、ベネッセコーポレーションの支援により、草間彌生などの前衛美術家の作品を招聘した、非日常的な世界を生み出しているユートピアのようなワンダーランドでした。開館されてすぐに出かけましたが、機会があれば再訪したいものです。

<「大阪中之島こども図書館」>

いつでも見学に行くことが出来るのに訪ねていません。おとなが子供連れでなく入館できないだろうと躊躇してから時間が経ちました。姪たちは訪れました。

「建築家・安藤忠雄が設計・建設し、大阪府に寄付した図書施設「こども本の森 中之島」が大阪・中之島公園内に 2020 年 3 月 1 日にオープンする。

読書を通じて子どもたちに「生きる力」や「考える力」を身につけてほしいという安藤氏の願いからはじまった同施設。乳幼児から中学生までをメイン・ターゲットに、絵本、童話、児童文学、小説、図鑑、自然科学書、芸術書など、さまざまなジャンルの本が、3フロア分の壁一面の本棚に並ぶ。中之島公園内への本の持ち出しも可能だ。

本屋・美術館などで編集型本棚を手がけるブックディレクター・幅允孝（BACH）がクリエイティブ・ディレクション手がけ、本の種類や配架の方法にも工夫が凝らされている。その1つ、同施設にゆかりのある人の本を紹介するスペース「あの人の本棚」では、1人目として、京都大学 iPS 細胞研究所所長で同施設名誉館長の山中伸弥の本を紹介する。

<https://www.japandesign.ne.jp/news/2020/01/51202/>

建築写真を見ると、「近つ飛鳥博物館」では、屋外の作られていた「階段」が「こども図書館」では、建物内に組み込まれています。象徴的なアクセントになっています。東大阪の「司馬遼太郎記念館」で試みられていた天井までの書棚は、専門家のアイディアを活用、「編集型本棚」の手法が「こども図書館」でも建築内に作り込まれております。

「こども図書館」は、「国会こども図書館」建築の経験を活かしたものか、調べていないので、わかりません。「建築の公共性」をこどもに焦点を絞り、実現した点では、驚きました。

「神戸こども図書館」でも大阪と同じ様式が用いられています。下記の建築写真は、神戸こども図書館のもので、オブジェの青い林檎は、安藤忠雄が制作した絵本から取り出した、象徴のようです。「読書を通じて子どもたちに「生きる力」や「考える力」を身につけてほしい」（前期引用文より）という安藤氏の願いは、次世代のこどもの未来をよいものにしたいという使命感でしょう。

<大阪中之島こども図書館告知>と<神戸こども図書館>館内



 こども本の森 中之島 × ワーママプロジェクト

特別企画

けんちくか
 あん どう ただ お

安藤忠雄 による

トークイベント

- こどもたち、世界へはばたけ -

ゲストにアナウンサーの方をお招きし、
 絵本のよみかきを行います！

2024
 日時 **11/3 (日) 13:30-15:00**

参加無料 定員 100名

対象 お子さま連れの方のみ

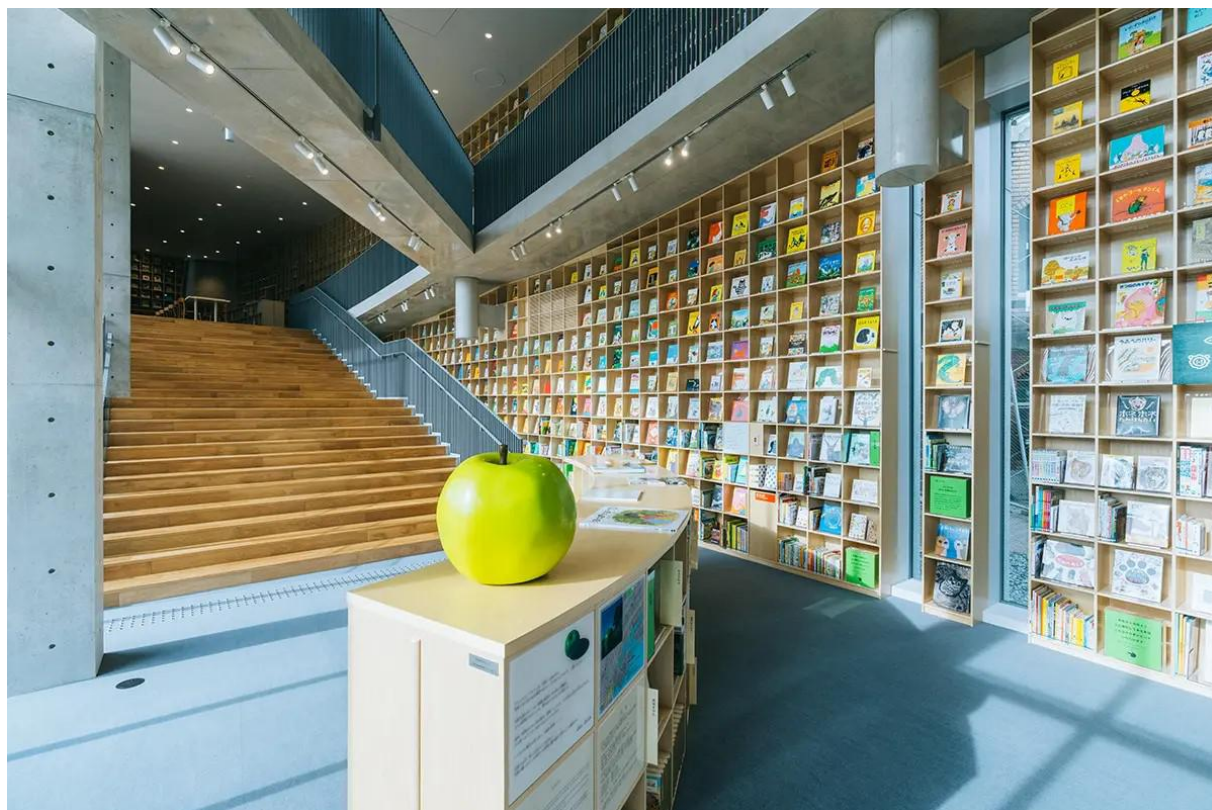
会場 こども本の森 中之島

予約方法

こども本の森 中之島公式HPより、10月20日(日) 午前10時から先着にて予約受付開始！

共催：株式会社エイブル

ワーママプロジェクトとは、(株)エイブルが実施している、子育て世帯の女性社員が仕事も子育ても両立しながら、働きやすい環境づくりを目指しているプロジェクトです。またママと子どもが安心して暮らせる住宅づくりも実施しています。



＜隈研吾は安藤忠雄の建築に憧れていた＞

1954年生まれの隈研吾の活躍ぶりは、現代日本建築界では、最先端を走り、トップであろうと思います。代表的な建築「新国立競技場」などがあります。よく言われる木材の建築をめざしたきっかけは、「木材を多用するようになったのは、阪神・淡路大震災（1995年）と東日本大震災（2011年）を見て、コンクリートなどの人工物で自然に立ち向かおうとする20世紀の思想が破綻したと感じたためであると回顧している。森林を手入れして生み出す木材は、人間と地球をつなぎ合わせる存在と位置付けている。また大型の公共建築物が「税金の無駄遣い」「環境破壊」と批判されるようになった時代に育ったうえ、経済成長の鈍化と高齢化が進んでいる日本の現状を見据え、周囲に調和した「負ける建築」や、「コンクリートと鉄の時代」を「木の時代」に変えることを志向している」（ウイキペディアより引用）

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E9%9A%88%E7%A0%94%E5%90%BE#9>

＜2025年日本国際博覧会（関西万博）大屋根リング＞



関西万博の開幕前ですが、これまで情報収取を怠っていたので、万博会場のシンボルである大屋根リングについて万博ホームページでは、興味深い紹介をしています。

「大屋根リングは、万博会場のシンボルであり、完成時には世界最大級の木造建築物となります。日本の神社仏閣などの建築に使用されてきた伝統的な貫（ぬき）接合に、現代の工法を加えて建築しており、会場の主動線として円滑な交通空間であると同時に、雨風、日差し等を遮る快適な滞留空間として利用されます。また、大屋根リングの屋上からは会場全体を様々な場所から見渡すことができ、リングの外に目を向ければ、瀬戸内海の豊かな自然や夕陽を浴びた光景、大阪の街並みなど、海と空に囲まれた万博会場

の魅力を楽しむことができます。」 <https://www.expo2025.or.jp/news/news-20240821-01/#:~:text=>

隈研吾の木材建築が2025年の関西万博に、どのような効果をもたらしているか会場へ出かけ、とくと感じてみたいと思います。

<福井県立大学恐竜学部開校に関する建築>



<恐竜学部学舎>

<https://news.yahoo.co.jp/articles/688984f49a15986970984e25a5a3790e5fd78799>



「恐竜学部」という SF のような大学の学部が開設されることに本当だろうかと驚いた。建築設計を大胆でパワフルな造形を発案する隈研吾に託されたという。福井の地域情報によれば、次のような紹介がなされていた。

「世界で初めての学部であり、世界に発信する力のある建物にしたい」と意気込みを

語った。学部棟は同市の県立恐竜博物館に隣接して整備され、設計は国立競技場などに関わった隈さんの「隈研吾建築都市設計事務所」（東京）が担った。学部棟は主に鉄筋コンクリート3階建て。高速、高圧で水を噴射する「ウォータージェット」で外壁のコンクリートを削り、細かい凹凸を付けることで、化石が眠る地層を表現する。」（福井 NEWS WEB）

<https://www3.nhk.or.jp/lnews/fukui/20241011/3050019033.html>

愉快的な学びの学部が誕生することにエールを送りたい。建築の完成が楽しみである。

2. まとめ

A, 安藤忠雄の建築への取り組み

建築作品から見た感想は、造形スタイルに一貫性がある。スタイリッシュでどの建築にもシャープさが感じられる。安藤氏の発言や、著書から読み取り創造ポリシーを把握する作業をまだ、やっていない。個々の建築に見られるアイディアのひらめきや独創性は、際立っている。私のような素人の眼にも伝わる。

B、隈研吾の建築への取り組み

大仕事を大胆かつどのプロジェクトも独創的に生み出す隈研吾の創造ポリシーが意外である。『負ける建築』岩波書店の書物も執筆されているが読んでいない。制約条件への配慮を怠らないというスタンスは、気が弱い、消極的な態度と誤解されかねない。依頼主との合意を十分、得た上で、建築家の原点である独創性の根本は、ゆるぎなく、という堅固な姿勢を取るというのである。

ネット資料から、NHKの番組「プロフェッショナル仕事の流儀」での発言が記録されているのを見つけた。下記に紹介する。

「負ける建築」というポリシーを知り、頷かされた。「独創的であると同時に、社会に受け入れられる建築案を作るため、隈はある流儀を貫き通している。それが「負ける建築」である。「負ける建築」とは、自己主張するのではなく、周囲の環境に溶け込むような建物を建てること。さらには、予算や敷地などの「制約」を逆手にとって独創的な建物を生み出すことを指す。」「NHK プロフェッショナル仕事の流儀」（2007年4月10日放送）

<https://www.nhk.or.jp/professional/2007/0410/#:~:text=>

説得力ある仕事への取り組み方針、製作姿勢の表明である。後編のエッセイでは、現代社会における建築の在り方を考える方向で、再度、探求してみたい。

（まじま まさおみ）

【資料】「芸術と文化を守ることは、われわれの民主主義を守ること」

—ベルリン市州政府の文化予算削減計画への抗議行動—

以下のベルリーナー・アンサンブル（ベルリンの演劇劇場、国立〔州立〕ではなく、組織としては有限会社の形態を取るが、じっさいには、由緒ある劇場として、国立劇場に準じた規模の文化予算を持つ）のHPに掲載された一文は、最近提案されたベルリン市州政府の文化助成の大幅な削減計画に反対する意図を詳らかにするものである。

ベルリーナー・アンサンブルでは、役者が上演中の芝居を中断して、この声明を観客の前で読み上げ、市州政府に抗議し、市民の広範な賛同を得ようとするほどに、文化芸術関係者の危機感

は切迫している。

財政が危うい状況になると真っ先に文化予算が切られるのは、日本では「普通」であるが（もっとも、日本の自治体の「文化予算」なるものは、ドイツのそのせいぜい1～数%程度に過ぎない）、ベルリンでも、とりわけ保守のCDU〔黒：キリスト教民主同盟〕を首班とする市州政権になると（連立の相手はSPD〔赤：社会民主党〕である）、同じような行動に走るものらしく——もとより、1年半前までの「革新都政」（赤〔SPD〕＋赤〔左翼党〕＋緑〔緑の党〕による連立）ならば、こうした削減計画が策定されなかったであろうという保証はないのだが——、ここに見られるのは、歌劇場、コンサートホール、劇場等、ベルリンのあらゆる領域の文化関係者が強い危機感を示す、市州政府への抗議である。

出典：["Kunst und Kultur verteidigen heißt unsere Demokratie verteidigen!" | berliner-ensemble](#)
(照井日出喜 訳)

ベルリンの一連の劇場と歌劇場、さらには、各種の博物館、図書館、ベルリンのクラブ委員会（訳注1）、市州音楽協議会（訳注2）とともに、100を越えるさまざまな公共機関や連盟、グループ、そしてまたフリーランスとして活動する人びとは、“ベルリンは文化（BERLIN IST KULTUR!）”というタイトルのもとでの共同行動において、現在、ベルリン市州政府によって計画されている文化予算の大幅な削減計画が惹き起こすであろう帰結について、注意を喚起したところである。

このような、過去に例を見ない、ベルリンのあらゆる文化施設が結束して参集したという事実自体、すべての団体に対して、現在、予定されている予算削減措置による危険が、いかに深刻なものであるかを如実に示している。

わたしたちベルリーナー・アンサンブルは、上演中の公演を中断することによって、この事態がいかに緊急な対応を必要とするものであるかを示した。女優ジーナ・マルテンスの発言は、以下の通りである。

現在、ベルリンの市州政府は、ベルリンの諸文化施設に対して、10%の予算削減（訳注3）を義務づける決定を実施しようとしております。しかもそれは、2025年から、すなわち、芸術上のさまざまな合意がすでにはるか以前に締結され、進行している最中に、即時、実行されるということです。一見、さほど大きな影響をもたらすものではないかのように思われますが、しかしこの削減計画は、それが実施に移された場合には、ベルリンの芸術と文化に激震を惹き起こすことになるものにほかなりません。

この削減計画は、ダンスやフリーランスの活動に対し、文学と美術に対して、深刻な影響をもたらすものです。それはまた、行政によって助成される、たとえばベルリーナー・アンサンブルのような劇場にとっては、数カ月のうちに、芸術部門の予算の50%に及ぶほどの削減を余儀なくされることを意味します——それというのも、ただ芸術部門の予算においてのみ、削減という措置を実施することが可能だからです（訳注4）。それは、具体的には、たんに個々の演出作品において中止に追い込まれるものが出てくるのみならず、最終的には、専属の役者のアンサンブルによるレパートリー・システムという、わたしたちの劇場運営そのものの存続を脅かすことを意味することになります。劇場が支払い不能となる可能性も、排除することはできません。

文化芸術の領域に対するこうした理不尽な予算削減は、わたしたちの市民的社会（Zivilgesellschaft）（訳注5）に決別を宣言することでもあります。それというのも、まさしく文化こそは、民主主義的な諸団体を結束させるものとして存在するはずの市民的社会そのものであるからです。

デジタル化の進行をもその理由の一つとして、人びとの孤立化が深刻化する時代においては、文化上のさまざまな場は、人びとがなおそれぞれの職場を超えて出会い、意見を交換することのできる最後の砦に属するものです。すなわち、そこでは、さまざまな世界観が、他者のものを抹殺しようなどという意図を持つことなく、一つの共通の舞台を獲得することになるのです。

芸術と文化は、社会システムにとって本質的な意味を持つものです——少なくとも、わたしたちの社会システムが民主主義という名を持つ限りにおいては。芸術と文化は、ベルリンにおける経済的な要因としても、社会システムにとって本質的な意味を持つものです。芸術と文化を守るということは、わたしたちの民主主義を守るということにほかなりません。

それというのも、いまのこの分断とポピュリズムの時代に、そしてまた、文化に対し、多様性というものに対し、そしてまた、互いが協力的に振る舞う市民的社会というものに確信を持たぬばかりか、むしろ逆に、積極的にそれらを抹殺しようと画策している諸政党がドイツの諸議会に議席を得ている時、いまのこの時代には文化的施設などは消えても構わないと考える者は、何が危機に曝されているか、その危険性を理解できぬ者であるからです。

芸術と文化は、対話であり、反省であり、そしてまた討議なのであり、つまりは、わたしたちの民主主義にとって必要不可欠な温床を形成するものです。

わたしたちは、わたしたちが誰であるか、誰であったか、そしてまた、未来においてわたしたちがどのような存在であることを望むのか、こうしたことについて思いを巡らすことを忘れてはなりません。

わたしたちは、ベルリン市州の財政の0.25%を節約することを目的として、きわめて短期間のうちにベルリンの文化的風景を破壊するが如き、思慮を欠いた政治的な予算削減のために、わたしたちの市民的社会を犠牲に供することを許すことはできません。べ

ルリン市州の全予算の2.5%を構成するに過ぎない文化予算は、もともと最小の支出項目をなしています。皆さまが、この件についてご自身で積極的に働きかけを行なおうとなさるのであれば、間違いなく再選されることを望んでいる、皆さまの地域のベルリン市州議会議員に、短いメールを送信していただくだけで、わたしたちのこの運動への支援となることは間違いありません。

わたしたちは、わたしたち相互のための闘いを停止してはならず、そしてまた、わたしたちの公共性を、いささかの議論も欲することのない人びとに委ねてはならないのです。

民主主義の崩壊を阻止せよ。

市民的社会の崩壊を阻止せよ。

文化の崩壊を阻止せよ。ベルリンこそは文化。

- (訳注1) 「ベルリンのクラブ委員会」は、各種のパーティーやコンサートに関わる諸団体の組織で、「クラブ文化」を提唱している。
- (訳注2) ベルリン市州音楽協議会 (Landesmusikrat Berlin)は、音楽関連の諸団体を網羅した組織で、じつに60万人に及ぶベルリンの音楽関係者を包括しているとされている。
- (訳注3) ベルリーナー・アンサンブルの芸術監督であるオリヴァー・レーゼの名で発表された声明には、この削減は、「この劇場にとっては、約200万ユーロ〔3億2000万円〕を、じっさいに演劇活動が展開されている最中に節約しなければならぬことを意味します」と書かれている。手元の資料 ([Theateralmanach – edition Smidt](#)) は、やや古いものであるが、ベルリーナー・アンサンブルの年間予算は1.800万ユーロ (29億円)、助成が1.200万ユーロ (20億円弱、2015年) となっており、ベルリン・ドイツ劇場の場合には、年間予算が2.900万ユーロ (48億円弱)、助成が2.440万ユーロ (40億円) となっている。ベルリン国立歌劇場等のオペラハウスの場合には、演劇専用劇場のほぼ倍か、それ以上の財政規模で運営されている。なお、劇場の場合、予算の約80%は人件費と言われている。
- (訳注4) わたしが知る限り、劇場の膨大な職員と、だいたいは数十名に及ぶ劇場直属の役者とドラマトゥルク (芸術監督直属の学芸員的存在) とでは、前者が賃金 (Lohn) であるのに対して、後者は報酬 (Gage) の相違がある。すなわち、前者は、芸術監督の交代によっても基本的に異動はなく、賃金は労組 (産別) が獲得したものに依拠するのに対して、役者やドラマトゥルクといった芸術部門は、芸術監督との個別契約によって報酬が決定されるのがつねである。役者の契約期間は基本的に2年で、芸術監督が「戦力外」と判断した場合は、契約満了の1年前にそのことを通告することになっており、したがって、その場合、役者は契約の2年目を、舞台上で演じつつ、移籍先を探さなければならないことになる。もちろん、かなりの場合、契約は延長されることになるのであるが、劇場に対する今回のような強引な予算削減案が実施されることになる場合には、そのしわ寄せは後者に向けられ、契約の解除を余儀なくされる場合が激増するであろうことが意図されていると思われる。
- (訳注5) Zivilgesellschaft は、「市民的社会」、「民主主義的社会」、「文明的社会」といったニュアンスで用いられる概念で、“civil” は、「非暴力的」、「非軍事的」という意味も持っており、言論によるコミュニケーションで成立する (はずの) 社会、という内実を持つ社会ということのように思われる。2015年前後、ドイツで大量に入国する難民を巡って流血沙汰が惹き起こされるのではないかと危惧されたさいにも、「Zivilgesellschaftを守れ!」というモットーのもとで、極右に対するカウンター・デモと多数の人びとの献金による非暴力の運動が展開された。



芝居（彼女の一人舞台）を公演途中で中断し、抗議文を読み上げるジーナ・マルテンス
（ベルリーナー・アンサンブル、2024年10月16日）

（てるい ひでき）

近況短信：ファンタジーにある「古い」

—団地タクシー奮闘記「運搬ロボットはいかに」の巻— (23)

宮崎 昭

この「団地タクシー」を運転しているのはこの7月76歳になったキャリア6年目の老人です。タクシーを利用している人たちも老人です。いわば、ローロー(老老)相互扶助の泣き笑い報告です。

ここで「タクシー」と銘打っていますが、電動アシストのついた、重さ100キロ近くある三輪自転車です。ヒトとモノを乗せると自身の体重もあり、かなりの重量になって、ペダルが相当重くなります。坂道があるから余計大変です。「開業」して12年以上になりました。

以前、この欄で、団地タクシーを利用する人たちの手荷物、お荷物について紹介したことがありました。基本、団地タクシーは人間を乗せ運ぶことが使命でして、荷物だけの搬送はお断りしています。あくまで「手荷物」程度の分量を一緒に戸口まで運んでいますが、時にかなりの「お荷物」を請け負うこともあります。

なかには、週1回の買い物で大量の買い物をする人がいますが、毎日のように利用する住民のほとんどはレジ袋ひとつにまとめ、軽々と持ち運びできる程度です。

そこへ降って湧いたような話が飛び込んできました。

§

なんと、自動運搬ロボットの導入お誘いがきたのです。横幅50センチ、縦幅80センチほどの積載ボックスを積んで、団地タクシーもしくは歩行する人間の後を自動で追従する優れものです。前方を移動する対象者(車)をセンサーで認識、記憶し、道草は絶対しません。ロボットとの間に突然邪魔が入っても、急停止します。

積載120kg、牽引300kg、20km走行7~8時間、充電8時間という能力ですから使い勝手がよいのです。忠実に前を追従する姿は、まるでカルガモのお母さんについていく子ガモのようで、いかにも愛くるしいのです。実験走行をおこなったのですが、通りを歩く住民の人たちが驚き目を細めたことは言うまでもありません。

テレビなどで、流通センターの集荷・配荷の作業をロボットが行っているのを見たことはありますが、直接間近に接するのは初めてのことだったので、少々感動してしまいました。なにせ、笑顔はありませんが文句もありません。“精一杯がんばります”とも言いません。

機械が人間の労働力に置き換わるわけですから、私たちの就労、ボランティアの機会が減少することになります。労力が不要になりますから、大歓迎です。でも、突然ですが、また突飛な話ですが、「お返し」をどうするか課題が残ります。電気洗濯機やレンジなどの電化製品に首までズッポリはまり込んでいる我が身としては、これを機会に「お返し」を考え込んでしまいました。別の言い方をすれば、お礼と感謝の気持ちをどのようにして伝えたらよいのか。もちろん、家電

製品の日ごろの活躍ぶりに、「ありがとう」の気持ちをいつも持っているわけではありません。そんな風に考えるのが、おかしいですね。自分でもそう思います。

§

でも、ですね。洗濯機など、黙々と「働いている」姿は感動的でさえあります。たとえば、「彼ら、彼女ら」が元気に働いている（作動している）うちはそうは思わないのですが、ひとたび故障するなり老朽化して手放さなければならないとき、惜別の情がわいてこないでしょうか。擬人化と言ってしまうとそれまでなのですが、口に出すか出さないかは別にして、一声「ご苦労さんでした」とつぶやきたくなります。実際、5年ほど前に1,000キロは供に走ったロードバイクを手放したときは、本当に哀しかったです。大分の耶馬溪、大宰府の天満宮、北海道・洞爺湖一周、思い出が昨日のここのように浮かんできました。

いやまー、自動運搬ロボットの話でしたね。分身であるかのような愛着は、未だ実験段階なのでうまれてきません。別れるのなら今のうちです。情の話ではなく、実際の苦労の話が大きく染み出してくるからです。

そうです、団地タクシーでは叶わなかった重たくて大量の荷物を運ぶのには最適です、もちろん。ただ、運搬ロボットのカーゴに荷物を積み込むところまでは、運転手はサポートできます、なんとか。しかし、目的地に到着した後、その大量の荷物を住民の戸口まで、場合によっては部屋の中まで運ぶのは誰なのか、想像すると“ゾッと”します。いまのところ、そこまでは考えていません。でも、実際の運用となるとそこが大きくものを言います。

加えて、エレベータのない難敵の階段があります。途中踊り場が何か所かありまして、どうせなら階段を上って荷物を運んでくれれば、と思ってしまいます。目の前の運搬自動ロボットはそこまでの“気力”も“体力”もないようです。

§

これが一番の問題かもしれません。忠実なロボットくんですが、結構な値段がするのです。企業であれば、これを資本として活用し生産性を上げて利益に結び付くのですが、こちらは寄付でまかなう非営利の自治組織ですから、「減価償却」の見通しもたっていません。私の拙い計算ですと、1日10人が利用するとして、おひとり1,000円の寄付をいただかないとなりません。

やっぱり、非現実的な話なのかもしれません。鉄腕アトムの世界はもうすぐそこまで来ていますが、私たち「人間の側」にある事情が壁となっています。

*「団地タクシー」は、八王子市内のUR大型団地内でボランティアによる運行を行っている三輪自転車です。

(みやざき あきら)

【研究ノート】

市民の平和力とは何か（中）

中村共一

*ようやく市民科学通信 53 号の続編が出来上がりました。いまだ未成熟の原稿ですが、いったん公表することになりました。また、目次構成も変更しています。今後もこんな調子になりそうです。なんとも困った自分なのですが、これも僕の「闘い方」です。ウクライナやパレスチナの戦況の拡大が、わたしたち市民の自由を益々抑圧しています。未来は、つねに平和が拓かれるべきなのに、遺憾ながら、自らの平和力もかばそい。なお、本文にある引用文中の〔 〕はすべて中村が追加したものです。

- (1) 「永遠平和」論の特徴
- (2) 「永遠平和」論の超越論的視座 —人間の自然本性— (以上、51 号)
- (3) 「永遠平和」の力
 - 1 フロイトの「死の欲動」 (本 53 号)
 - 2 文化と「超自我」
 - 3 「文化の超自我」と交換様式論 (以下、次号)
- (4) 「永遠平和」と「市民の平和力」
 - 1 憲法 9 条と「非戦の論理」
 - 2 「完全な市民社会」への新「対抗文化」運動

(3) 「永遠平和」の力

1 フロイトの「死の欲動」

市民科学通信 51 号の「市民の平和力とは何か（上）」でみたように、カントの永遠平和論は「人間の自然本性」を基礎視座に据えて、論じたものでした。

それは、「人間の意志の自由の働きを全体として眺めてみると、自由が規則的に発展していることを確認できる」¹として「人間の自然本性」（理性）を位置づけ、その視座から「普遍史」をとらえ、またそれにより近代国家の戦争状態を批判し、「国家の連合」という「社会的社会性」に、戦争そのものを無くす「永遠平和」への方途を語るものでした。イマヌエル・カントの永遠平和論は、たんなる理念ではなく、その主張の根拠として「人間の自然本性」（人間理性）を提示し、その視点から「非社会的社交性」（他者の手段化／戦争）を批判し、また「社会的社会性」（他者を手段とみなすばかりでなく目的とする／平和）への「実践理性」（倫理）を提起していたのです²。

世界大戦の状態に入った今日の世界——これは資本主義に起因し、その限界を示すものですが——では、ふたたび暴力的な「非社会的社会性」が社会の前面に出現してきています。カントの永遠平和論は、それゆえに、あらためて論じられるべき大きな意義をもっています。とはいえ、基礎視座に据えられたカントの「人間の自然本性」論は、「倫理」をベースにする限り、永遠平和という目的は示せても、その目的の根拠を示すものとはいえません。換言していえば、カントは、永遠平和への実践理性（倫理）を明らかにしたわけですが、なぜ永遠平和という倫理が生まれてくるのか、その根拠を示していないのです。この点が解明されない限り、永遠平和への展望ばかりか、それを実現する「世界市民の力」が捉えられてこない。カントの永遠平和論には、そういう理論的な限界が含まれていました。

しかし、カントの倫理（社会的社会性）論の難点を克服しようとした人物がいました。「無意識」にある人間の「欲動」³を理論化しようとしたドイツの精神分析学者、ジークムント・フロイト（1856～1930年）です。

第一次世界大戦後、戦争神経症患者にみる「反復脅迫」的な症状が、従来の快感原則とそれを抑制する現実原則の二元的な精神分析では説明できない困難に直面し、フロイトは、それらの欲動の根底に「死の欲動」を見いだし、あらためて心的な装置を分析する方法を再構築しています。この「死の欲動」の発見が、後期フロイトにおいて、カントのみた「永遠平和の倫理」を根拠づける「超自我」の解明にむすびついていくのです。精神分析論には無知な僕には、フロイトに対する理解のミスが避けられそうもありません⁴。が、「死の欲動」をベースにしたフロイトの平和論を、僕なりに受け止めてみたいと思います。

まずは、無意識の根底に「死の欲動」を位置づけた点からみていきます。

フロイトは、第一次大戦の最中、「戦争によってわたしたちのうちで後代に形成された文化的な層が剥ぎとられ、中に潜んでいた原始人がふたたび前面に登場するのである。戦争においてわたしたちはふたたび、自分が死ぬことを信じない英雄となることを強いられる。見知らぬ者を敵とみなし、敵を死にいたらしめ、敵の死を願わせるのである」⁵と述べ、「原始人がふたたび前面に登場する」事態に直面し、人間に潜む「攻撃欲動」（「死の欲動」）の存在の大きさに気づきます。その後、『快感原則の彼岸』（1920年）⁶では、戦争神経症患者が示す「反復脅迫」に注目し、これまでの快感原則と現実原則という従来の二元的な枠組みでは、これが理解できないことを悟ります。そしてまた、フロイトは、「死の欲動」がもたらす「反復強迫」が「快感原則を凌ぐものであり、快感原則よりも根源的で、基本的で欲動に満ちたもの」⁷と位置づけ直し、あらためて心的な装置（精神）の分析方法を理論化していくのです。

欲動には二種類あるが、その一つは性欲動あるいはエロスである。……そして生物学に裏づけられた理論的な考察に基づいて、われわれは死の欲動の存在を想定した。この欲動の課題は、有機的な生物を生命のない状態に戻すことである。これに対してエロスの目標は、分散されて分子の状態になっている生命物質を広範に結合して、生命を複雑なものとし、当然ながらそれによって生命を維持することにある。この二つの欲動は、厳密な意味で保守的にふるまう。すなわち、生命の発生によって攪乱された状態を、攪乱されない状態に回復することを目指すのである。このように生命の発生は、生き続けることの原因であると同時に、死へと向かう営みの原因である。生命とは、この二つの営みの間の闘争であり、妥協である。生命の起源の問いは、宇宙論的な問いであり、生命の目的と意図に従って、二元論的に答えられるものに違いない。⁸

このように「死の欲動」を人間の「欲動」の根底に位置づけ、エロスと死の「二つの欲動」から生命を捉えていくことになります。生命の発生は「生き続けることの原因であると同時に、死へと向かう営みの原因である」とし、この認識が、さらに「生命の起源の問い」に、「生命の目的と意図に従って、二元論的に答えられるもの」となるというのです。ここには、「精神分析」が人類の起源を解く視点を獲得する新たな境地が拓かれています。フロイトの文化論は、この象徴となるものです。

たとえば、フロイトは、『文化への不満』（1930年）⁹では、「無機的な状態」を原始的な家族を位置づけながら、人間の「有機的な状態」（文化）が生成するプロセスを以下のようにとらえます。

この原始的な家族においては、文化のある重要な特徴がまだ存在していない——ただ一人の家長であり、父である人間のオスの恣意にいかなる制約も加えられていないのである。『トーマとタブー』では、この原始的な家族から、共同生活の次の発展段階である兄弟の連合が形成される経過を描こうとした。息子たちはこの父を殺害することで、単独ではなく、力を合わせ

ることの強さを身をもって経験したのである。トーテミズムの文化は、この新しい状態を維持するために課す必要のあった制約に基づいているのである。タブーは最初の「法」だったのである。¹⁰

フロイトは、このように共同体（兄弟の連合）の成立を、「原父殺し」の物語（「エディプス・コンプレックス」）によって説明しています。「原父」により「抑圧されたもの」が、氏族社会の「兄弟の連合」によって「回帰」するというわけです。そして、ここに、「個人の力を共同体の力に置き換えることが、文化の決定的な一歩」だとみるのです。この一歩とは「本質的に、個人は自分の満足を抑制することを知らなかったが、共同体の一員としては、みずからの満足を実現する可能性を抑制するようになる」¹¹として、フロイトは「正義」を軸に「文化の発展」を捉えるのです。フロイトの歴史観がよく表れている次の文を引用しておきます。

文化の次の一歩は、〔共同体の〕正義が要求されることである。正義とは、ひとたび確立された法の秩序が、いかなる個人の利益のためにも破壊されないことを保証することである（…………）。文化的な発展における正義の次の〔国家〕段階は、腕力の強い個人が他の個人にたいして恣意的な暴力をふるったように、この小さな共同体（カースト、階層、民族など）が、別のおそらくもっと多数の大人で構成される集団にたいして、恣意的な意志を強要しないようになることだろう。正義の最終的な〔国家を超える〕段階は、共同体の成員になる資格のあるすべての人が、自分の衝動を抑制して正義に貢献するとともに、共同体のすべての人が、むきだしの暴力の犠牲にならないように、正義によって保証される状態であろう。¹²

こうした「正義の歴史」に対する認識にはフロイトの歴史認識の深さがあります。とくに注目したい重要な点は、「正義の最終段階」という理解です。フロイトは、この段階で、社会が「正義によって保証される状態」——これは戦争がなくなる状態でもあります——に達することを展望しているのです。したがって、フロイトは、たんに「文化の発展」をみているわけではありません。「文化の根本的な転換」も、彼の視野にはあると言うべきです。次の引用文は、その論理を示しています。

個人の自由は文化の所産ではない。最大の自由が確保できたのは、文化が誕生する前の段階においてである。しかしこの状態では個人はみずからの自由を守ることができなかったので、この自由はほとんど価値がなかったのである。文化が発達すると、個人の自由は制約されるようになる。そして正義は、いかなる人もこの制約から免れないことを求めるのである。…………

ところが文化に飼いならされていない原初的な人格の残滓からも、自由への憧れが生まれることがあり、これが文化敵視の土台となることがある。だから自由への憧れは、ある形式の文化および文化要求と対立することも、文化そのものと対立することもある。教育によって人間の本性を、アリの本性と同じようなものに変えることができるとは思えない。人間はつねに、集団の意志に反してでも、個人としての自由を求める要求を防衛しつづけるだろう。¹³

ここで「原初的な人格」とは、文化以前の「死の欲動」（攻撃欲動）の「残骸」をさし、「自由への憧れ」がその「忘却されたものの回帰」を意味しています。したがって、原初的な「個人の自由」から「文化の発展」が展望され、「自由への憧れは、ある形式の文化および文化要求と対立することも、文化そのものと対立することもある」と説き、「人間はつねに、集団の意志に反してでも、個人としての自由を求める要求を防衛しつづけるだろう」という展望を示しているのです。フロイトも、カントと同様な「個人の自由」の視点から「普遍史」（文化の発展）を取り上げ、「無意識」の視点から自由（そして平和）を問題化しているわけです。では、その展望はいかなる論理（根拠）において捉えるのか。

2 文化と超自我

フロイトは、「死の欲動」において、「有機的な生物を生命のない状態」に戻す自我の攻撃的な欲動だけでなく、同時にそれと対立し、制約づける「超自我」を見いだしています。ここには、無意識の論理によって、戦争を無くしていく平和力の根拠を捉えていく方法が提起されているのです。それが、「超自我」という概念です。そこで、次に、「死の欲動」と「超自我」の関連に目を向け、「超自我」のもつ意味を探っていくことにします。

フロイトによれば、「死の欲動」とは、生物（有機体）が無機質に戻ろうとする欲動であり、外側に向けられたときには「攻撃欲動」となる。が、これを「内側に向け、内面化し、それが発生した場所、すなわち自分の自我に向ける」¹⁴ならば、それは「超自我として自我のほかの部分と対立している部分に取り込まれ、これが『良心』となる」¹⁵としています。この良心は、「ほんらいなら他の見知らぬ個人に発揮したかったはずの強い攻撃性を自我にたいして行使する」¹⁵ものです。こうして、「厳格な超自我と、超自我に支配された自我のあいだに緊張関係が発生する。これが罪の意識であり、これは自己懲罰の欲求として表現される。このようにして文化は、個人の危険な攻撃欲を弱め、武装解除する」こととなります¹⁵。したがって、「死の欲動」は、攻撃欲動を制約し咎める「反復強迫」を生み出すことにより、「超自我」に支えられた「良心」をもたらし、攻撃欲動に対抗する「力」ともなっていくのです。こうして「死の欲動」は、内的に対立しながら、個人の倫理を支える「超自我」、そしてまた平和を創り出す「力」とも結びついていたのです。

また、この論理は、同時に、個人の集合である「共同体の超自我」の論理ともなり、「文化の発展」の捉え方を示すものともなります。フロイトにとって「共同体」は、後にみるように「文化」の形態を意味しますので、「共同体」自体が文化を意味するのです。したがって、「共同体の超自我」は、同時に「文化の超自我」ということとなります。ですので、「共同体にもある種の超自我が形成されるのであり、この超自我の影響のもとで、文化が発展していく」¹⁶という関係も生まれてきます。前節でもみたように、「文化が発達すると、個人の自由は制約されるようになる」のですが、「文化に飼いならされていない原初的な人格の残滓からも、自由への憧れが生まれることがあり、これが文化敵視の土台となることがある。だから自由への憧れは、ある形式の文化および文化要求と対立することも、文化そのものと対立することもある」と述べられていました。これが「文化の超自我」なのですが、この超自我は、「共同体」を超える「力」ともなっていくのです。

したがって、「文化の発展」には、「二つの顕著な現象」があり、「一つは、知性を強めることです。そして力が増した知性は衝動をコントロールしはじめます。二つ目は、攻撃本能を内に向けることです。好都合な面も危険な面も含め、攻撃への衝動が内に向かっていくのです」¹⁷と述べ、フロイトは、「文化の発展が人間に押しつけたこうした心のあり方——これほど、戦争というものと対立するものは他にありません。だからこそ、私たちは戦争に憤りを覚え、戦争に我慢がならないのではないのでしょうか」¹⁸と語っていくことになるのです。

フロイトは、このようにカントが意識上でとらえた人間本性（倫理）の問題を、無意識（精神）にまで掘り下げ、その根拠を「超自我」として提起する。また、そこから戦争を無くしていく「倫理」を語っているといえます。ですので、「共同体の超自我」は、論理的に言えば、「共同体」を超えるものです。また、文化という点から言えば、「文化の超自我」の問題であり、「文化」を超える「文化」の問題ともなってきます。この点、僕の関心をもっとも引きつける論点ですので、次の文を参考にしながら、フロイトの文化概念を、もう少し見ていきたいと思います。

文化とは最初はばらばらの個人を、次に家族を、さらに部族、民族、国家などを、より大きな統一である人類にまとめようとするエロスに奉仕するプロセスなのである。

わたしたちには、これがエロスの仕事だということがわかるだけで、なぜこうした統一が行われるべきなのかはわからない。これらの人間集団は、リビドーの力でたがいに結びつけられる必要がある。

労働共同体のほうが有利だからという必然性の理由だけでは、人間集団を結びつけることはできないからである。しかし人間に生まれつきそなわっている攻撃欲動、すなわちすべての人がすべての人に対して抱いている敵意が、文化のこのプログラムに抵抗するのである。この攻撃欲動は、エロスとともに存在することが発見された死の欲動の主な代表者であり、この欲動がエロスとともに、世界を支配しているのである。

こうして、文化の発展の意味が明確になってきた。文化とは、人類という種において演じられたエロスと死の闘い、生の欲動と破壊欲動の闘いなのである。¹⁹

フロイトにとって、文化とは、「最初はばらばらの個人を、次に家族を、さらに部族、民族、国家などを、より大きな統一である人類にまとめようとするエロスに奉仕するプロセス」²⁰と捉えられるものです。自我は、「快感原則」（エロス）の追求を本性としながらも、このような個人の統一体（共同体）が与える「現実原則」によって制約されている——これが前期フロイトの論理です。したがって文化は、まずは個人を統一体に組み込んでいくものと考えられています。しかし、他方で、繰り返し指摘してきたことですが、「死の欲動の主な代表者」である「攻撃欲動」があり、それが「文化のこのプログラムに抵抗する」という点もあります。この「攻撃欲動」が個人の内面に向けられたものが、すでに述べてきた「超自我」です。また「共同体の超自我」としては、「文化の超自我」とも呼びうる対立的な「欲動」でもあります。フロイトは、「文化とは、人類という種において演じられたエロスと死の闘い、生の欲動と破壊欲動の闘い」とみなし、これが「文化の発展」を意味すると説くのです。このことは、文化において、「自我の文化」と「文化の超自我」のあいだの対立でもあり、平和にとってみれば、とりわけ後者の「強化」が問題となってきます。

このように、フロイトにあっては、文化概念は「二つ欲動」にそって把握され、二つの対立的な「文化」として捉えられてくるのです。ですので、「文化の超自我」が倫理をもたらし、平和の発展を支えるものとなるのですが、この両者は、あくまでも無意識に組み込まれた、人間の意志ではコントロールされない領域で「反復強迫」されてくる「宿命の対立」のようにも思えます。とはいえ、たとえば、良心（倫理）も、もう一つの「死の欲動」を代表しているわけですが、意識的な社会と深く結びついています。無意識は、操作不可能だとはいえ、意識とのつながりがあるのです。したがって、「二つの欲動」は、意識上においても「二つの闘い」が表れ、文化が知性をもたらしたように、その知性が「超自我」の「表れ方」を意志的に統整していくことも可能なのです。攻撃欲動は、単に戦争と結びついているわけではなく、個人のそれは、その表れ——政治やスポーツなどの文化闘争——は多様にあるのではないかと。であれば、「超自我」の統整こそが平和の課題となってくることになるように思えます。アインシュタインとフロイトの往復書簡『人はなぜ戦争をするのか』の末尾で、「文化の発展が生み出した心のあり方と、将来の戦争がもたらすとてつもない惨禍への不安——この二つのものが近い将来戦争をなくす方向に人間を動かしていくと期待できるのではないのでしょうか」と平和の展望を語ったのも、こうした「文化」の捉え方から来たものではないのでしょうか。

フロイトは、先の引用文にもあったように「わたしたちには、これがエロスの仕事だということがわかるだけで、なぜこうした統一が行われるべきなのかはわからない」という精神分析の限界が認識されていました。確かに、「文化の超自我」論は、「超自我」の対抗的な存在を明らかにしたものの、「超自我」がもたらす文化の内容までも明らかにしているわけではない。その内容を掘むためには、やはり、人類の意識的な歴史（普遍史）との関連が具体的に示されなければならないでしょう。そうでなければ、「文化の超自我」がなすべき人類の平和の課題（資本と国家を超える）が具体化されてこないのです。この点、もはやフロイトのなせる業ではありません。が、彼の理論的視野には、こうした課題も理論の片隅で意識されていたように思えます。この節の最後に、長文ですが、マルクス主義を批判したフロイトの一文を掲げておきます。

マルクス主義のすぐれたところは、察しますに、歴史の理解の仕方とそれにもとづいた未来の千言にあるのではなく、人間の経済的関係が知的、倫理的、芸術的な考え方に及ぼす避けがたい影響を、切れ味鋭く立証したところにあります。これによって、それまではほとんど完璧に見誤られていた一連の因果関係と依存関係が暴き出されることになったわけです。しかしながら、経済的動機が社会における人間の行動を決定する唯一のものだとまで極論されると、私たちとしましては、受け入れることができなくなります。さまざまに異なった個人や種族や民族が、同じ経済的条件下にあってもそれぞれ異なった動きをするというまぎれもない事実ひとつを見ただけでも、経済的契機の専一的支配というものが成り立たないことが分かるはずです。そもそも理解できないのは、生きて動く人間の反応が問題になる場合に、どうして心理的ファクターを無視してよいわけがあるかという点です。と申しますのも、経済的諸関係が生みだされるところにはすでに、そうした心理的ファクターが関与していたはずだからですし、そればかりか、経済的諸関係の支配がすでに行き渡っているところでも、人間は、ほかでもない、自己保存欲動、攻撃欲、愛情欲求など、自らの根源的な欲動の蠢きを発動させ、快獲得と不快忌避を衝動的に求めるからです。あるいはまた、以前の探究で超自我の重要な要求について論じておきましたように、超自我が、過去の伝統と理想形成を代表し、新たな経済状況からの動因に対してしばらくのあいだは抵抗したりもするわけです。²¹

(注)

1. イマヌエル・カント「世界市民という視点からみた普遍史の理念」(『永遠平和のために／啓蒙とは何か』中山元訳、光文社文庫 2006 年所収、32 頁)
2. 「【研究ノート】市民の平和力とは何か(上)」参照。
3. 難しい用語ですが、フロイトは、「欲動とは、生命のある有機体に内在する強迫であり、早期の状態を反復しようとするものである」(フロイト「快感原則の彼岸」(フロイト『自我論集』ちくま書房、1996 年所収、159 頁)と説明しています。
4. かつて「【コラム】『人はなぜ戦うのか 考古学からみた戦争』(松木武彦)を読んで -「戦争」の問い方を考える」(中村共一、市民科学通信 48 号)でフロイトに言及しましたが、フロイトの「死の欲動」に対する僕のミス・リーディングでした。今回の原稿は、それを訂正するものとなっています。
5. フロイト「戦争と死に関する時評」(フロイト『人はなぜ戦争をするのか』光文社 2008 年所収、95 頁)
6. 「快感原則の彼岸」(フロイト『自我論集』ちくま書房、1996 年所収)。
7. フロイト「快感原則の彼岸」(フロイト『自我論集』ちくま書房、1996 年所収、140 頁)
8. フロイト「文化への不満」(『幻想の未来／文化への不満』光文社 2007 年所収、245～246 頁)
9. フロイト『幻想の未来／文化への不満』光文社 2007 年
10. フロイト、同上、196 頁。
11. フロイト、同上、189 頁。
12. フロイト、同上、189～190 頁。
13. フロイト、同上、190～191 頁。
14. フロイト、同上、245 頁。
15. フロイト、同上、246 頁。
16. フロイト、同上、283 頁。
17. フロイト『人はなぜ戦争をするのか』光文社 2008 年、57 頁
18. フロイト『人はなぜ戦争をするのか』光文社 2008 年、57～58 頁
19. フロイト「文化への不満」(『幻想の未来／文化への不満』光文社 207 年所収、243 頁)
20. フロイト、同上、244 頁。
21. 「続・精神分析入門講義」(『フロイト全集』第 21 巻、岩波書店所収、235～236 頁)

(なかむら きょういち)